
きらきら万華鏡綺譚

ネネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きらきら万華鏡綺譚

【Nコード】

N6515K

【作者名】

ネネ

【あらすじ】

舞台は、様々な時代が混ざり合った和風の架空世界。主人公である円は、鬼の血を引く一族の娘。何不自由なく生きてきたある日、父が博打で失敗し、多額の借金を背負うことに！ そんな一家の危機を救ったのは、雨竜という名門の一族の当主だった。彼は借金の肩代わりをする見返りとして、円を妻に求めてきて――。少し勝気な少女の初恋話です。

唐紅の章1（前書き）

和風ファンタジーを目指してがんばります。（もちろん、恋愛要素もたっぷりです！）

初投稿なので、文章の粗さが目立ちますが、温かい目で見守っていただけたら幸いです。ちなみに、『唐紅』は作者の円に対するイメージカラーです！

唐紅の章 1

かつて、暗黒期と呼ばれた時代がある。

国は妖に支配され、乱れ、腐敗し、民はただ怯えて日々を過ごす

——そんな時代の幕を閉じたのは、ひとりの少女。姫巫女と謳われた少女の神聖なる魅力に、妖の中にもやがて、彼女に惹きつけられ、従う者たちが現れた。

幾度ももの長い戦いを経て少女は勝利し、凶悪な妖たちを各地に封じた。

その後、少女は妖の操り人形と化していた帝を廃し、自らが王位についた。そして、新たな王朝を築き上げる。

新王に付き従いし妖たちは人と交わり、その血が絶えるまで未来永劫変わらぬ忠誠を彼女に誓った。

そしてその血は——今も脈々と受け継がれている……。

かつて姫巫女を支えた五体の妖の血を引く一族は総じて『満月』と呼ばれ、今もなお帝の傍近くに仕え続けている。

彼らは自分たちのように妖の血が混じった人々に居場所を与えるため、『三日月寮』という機関を設立。寮は姫巫女が封じきれなかった数多の妖たちの討伐隊として重宝されている。

そして、満月と称された一族のひとつ——鬼の血を受け継ぐ鬼灯家には、ここ数十年来で最大の危機が訪れていた……。

「……へ？」

少し吊り上がり気味の大きな目をますます大きく見開きながら、鬼灯円は間の抜けた声を発した。

「いま、何て言ったの？」

「だからね——」

円の質問に母は芝居がかった調子で涙をぬぐい、本日二度目の説

明を始める。

その内容とは――

父が柄にもなく賭博に手を出し大損。このままでは一家そろって路頭に迷ってしまうので、円には嫁に行ってもらわねばならぬ……という、きわめて勝手なものだった。

（あの……えつと、ええー……？）

いかんせん突然のことなので、円の頭は話を理解しきれない。

「待って！ あのね……、お父様が借金をがっばり作っちゃったのは理解したわ。で、一家破産の危機に直面している、と……」

「ええ、そうなの」

「だけどね？ ——どうしてそこで、あたしがお嫁に行くって話になるの！？」

「それは、雨竜家の御当主がぜひにつて言ってくださったのよお」

（雨竜家……？）

雨竜家とは、蛟みずちと呼ばれる水を操る竜の一種である妖の血が入った名門である。雨竜も満月の一員だが、同じ満月の鬼灯とは格が違う。雨竜家は非常に多くの能力者を輩出しており、三日月寮内だけでなく、宮廷での発言力も大きい。

長い歴史の中で、妖の血は確実に薄れてゆく。鬼灯家では特殊な能力を持つ者は稀で、一族の中でも三人しか三日月寮に仕官していないというのが現状だ。

血の薄れと共に、宮廷内での力も弱くなってきた。

まあ、鬼灯の本家である円たち一家はそんなことは気にせず、これまでの人生を謳歌してきたわけだが……。

（これからは、そうもいかないってこと……かな）

「それで、雨竜家の当主がなぜあたしを妻に？」

「あなたの血が欲しいんですって」

円の疑問にずばり、母が答える。

（あたしの――血……？）

ああ、そういうことか……と、円の頭の奥がすっと冷えた。

雨竜家は知っているのだ。——あたしの、能力を。

円も、鬼灯家の中で能力を発した数少ないうちのひとりだった。女なので当然仕官はできないし、周りに能力を吹聴して歩くこともなかったのだ、一族の中でも彼女が能力者であることを知っている者は意外と少ない。

（それなのに、なんで——）

——雨竜家の当主が自分の能力を知っているのか？

新たな疑問が浮かんできたけれど、なんだかどうでもいい気分だった。

「あたしをお嫁にもらう代わりに、雨竜は何をくれるって……？」

「借金をね、肩代わりしてくれるんですって」

さすが雨竜。ずいぶんと羽振りがいいらしい。

つまり円は、雨竜の当主にお金で買われるのだ。

雨竜家の当主は、力の強い子供が欲しいということらしい。自分の一族からではなく、他家から嫁を取るのが謎だが、きっと円の能力を気に入ったのだ。円と同じ能力を持った子供が生まれたら運がいいな——といったところだろう。

（なんか、ひどくない？）

それでも、家族に愛されて育ってきたつもりである。それが、母はこんなにお気楽な調子で喜んでいるし、そもその原因である父は顔も見せにこない。

借金のかたに娘を嫁にやることに、なんの疑問も、罪悪感もわかないのだろうか？

（あたしって、自分で思ってるほど大事にされてなかったのかも……）

目頭が熱くなり、急激な怒りがわき上がる。その衝動を服の裾をつかみながら必死に耐えた。

そんな娘の肩に、母がそっと触れる。

「円、怒ってる？」

「……」

「確かに突然だったけど……、私はあなたにとって、とってもいい縁談だと思うの」

それは、確かに。世間的に見ればかなりの良縁だと言えるだろう。（だけど、あたしの意思は？）

いつか恋をして、その相手も自分を好きになってくれて……。そんな、物語みたいな結婚に憧れを抱いていたのに――。

（だいたい、当主って幾つよ！？）

自分の父と同じくらいなのでは？

（それで独身って、ちよつとないよね……）

なんといつても、相手は超がつく名門なのだから、その歳で独身なんてありえない。女なんて選り取り見取りだし、周りの親戚も独り身のまま放っておかないだろう――。

「……？」

あれ、と円はある事実に行きついてしまい、固まった。

（それってつまり……）

「あたし、お妾ってこと！？」

がばつと立ちあがった円は、そのまま大きく息を吸うと――

「信じらんない――い！！！！！！」

屋敷中に、いや、ご近所中に響き渡るほどの怒声を吐き出しながら、乱暴に部屋を出て行ってしまふ。

残された母はというと――

「……耳、痛い……」

それにしてもあの子ったら、ひとりで暴走してすっかりご機嫌ななめね……と、溜息をつく。

「円の血が欲しいだなんて、ただの立前なのにね」

はたして、雨竜家の御当主は無事にあの子を妻に迎えることができるのかしら？

今の円の状況を考えて、当主を気の毒に思いながらも、これからの展開への期待に、彼女の胸はときめきを抑えきれなかった。

唐紅の章 1（後書き）

いかがだったでしょう……？

この作品を読んで、少しでも興味を持ってもらえたのなら嬉しいのですが。

円の能力や結婚相手など、まだまだ謎の多い作品ですが、次回もぜひ読んでください！

唐紅の章2

小さな頃から、見えてしまった。近い未来に起こることや遠く離れた地の出来事。

おぼろげに、時折はつきりと――。

それは、千里眼と呼ばれる能力だった。

失せ物をした時など、その能力は役に立つこともあったけれど、円はその力を好ましく感じたことはない。

彼女の千里眼は完璧ではなく、制御が利かない。自分の意思とは裏腹に、見たくないものまでが見えてしまうことも度々あった。

そして何より、千里眼を通して映像が見える度に痛感する事実。自分は普通ではないのだと……、異能の存在なのだと認めないわけにはいかなかった。

（こんな力、いららない）

大嫌いな能力。なのに、その能力を見染められて嫁入りするだなんて――。

「やっぱり、嫌」

嫌だけど、どうしようもない。円が嫁に行かなければ家族は生活していくことさえ困難な状況なのだ。

（なんかもう、頭の中ぐちゃぐちゃ……）

こんな状態で起きていても嫌なことしか浮かんでこない。

今日はもう、寝てしまおう！ 円は自室に引き上げて、早々に布団にくるまる。

途中で夕餉だと声をかけられたり、母が猫などで声で話しかけてきたりもしたけれど、完全に無視して、円はふて寝を決め込んだのだった。

――明くる朝。

円は思いがけず爽やかな気分が目が覚めた。

淑女らしく、手で口元を隠しながらあくびをひとつ。

すると、なんとというか……、縁談に対するあきらめ……いや、覚悟というものがすんなりとできてしまった。

（あたしって、ずいぶんと神経が太かったのね……）

一晩寝ただけで、ここまで気分を切り替えられるとは——我ながら恐ろしい。

（結婚？ 妾？ どんとこいつてのよ！！）

家族のためならば、そのくらい何でもないではないか！

高まった気分もそのままに、さらに言うつと寝巻き姿もそのままに、鼻息も荒く円は自室を後にした。

鬼灯家の奥方——つまりは円の母である弥生やよいは、まだ陽も昇りきらない早朝に、娘によつてたたき起こされた。弥生の隣でいびきをかいていた父、安明やすあきも同様である。

「なんだなんだ！？」

賊でも侵入したのかと、慌てて飛び起きた安明の目に映ったのは、仁王立ちをして彼を睨めつける娘の姿——。

「おお！……つと、なんだ円か、驚かせるなよ」

まったくこんな朝っぱらから何なんだ……と言葉を続けようとした安明はしかし、娘の尋常でない気配に口をつぐむ。

「お父様！」

「は、はい！」

「お母様！」

「あらあら、なあに？」

「あたし、覚悟を決めました！ 妾だろうがなんだろうが、立派に努めてみせます——！」

「お前、妾って……」

「それだけ言っておこうと思って」

では、と言いたいことだけを言って、娘は両親の寝室から去っていく。

「え、妾^{めかけ}って……、え？」

どういうことだ？ 安明は視線で妻に問いかけた。

「あの子、雨竜家の当主はすでに本妻がいるって思いこんでいるみたいで……」

昨日とは打って変わった娘の様子に、弥生も少々驚きながら答える。

「それはなんというか……、面白い展開だな」

「ええ、本当に」

ほほ、と弥生は上品に笑う。

「しかし——」

安明はそこで口ごもる。

「蒼君^{あおい}にとっては気の毒かもしれんなあ」

「そうねえ……」

夫婦はひとりの青年の面影を思い浮かべ、そつと溜息をついた。

円はいつものとおり、小袖と袴という女学生スタイルで屋敷を出た。

帝都の東に位置する可憐女学院。その高等科に、彼女は通っている。

登校時間ともなると、朝の妙な興奮は冷め、少々早まったかなーと円は思い始めていた。

結婚することに一応は納得したものの、もう少しくらい駄々をこねてもよかったのではないだろうか？ それぐらいの権利はあったはずだ。その権利も自分で捨ててしまったわけだが……。

一度了承したことを無かったことにはできない。婚姻話はこのままトントン拍子で進むはずだ。

（ああ、気が重い……）

何が悲しくて、花盛りの自分が中年オヤジなんかの妾にならなければいけないのか。

「そういえば、お父様のせいよね」

そうだ！ 父が博打なんかに手を出したのがそもその原因だった。

「ああー、失敗した！」

朝に一発くらい殴っておけばよかった！

自宅に戻ったら、何が何でも殴ってやろう。

そう心に決め、円は女学院への道を急ぐのだった。

悶々としながら授業をこなしているうちに、あっという間に放課の時間になった。円は荷物をまとめると、友人たちに別れのあいさつを済ませ、校舎を出る。

校門付近へとさしかかると、ひとりの女性の姿が目に入った。

なかなかいい身なりをしている。女性の雰囲気から誰かを待っていることが伝わってきたので、おそらくどこかの家の使用人だろうと円はぼんやりと思う。

可憐女学院は帝都内でも一、二を争うお嬢様学校なので、家の者がこうして迎えに来るのは珍しいことではない。どちらかというと円のように供も付けずに登下校しているほうが稀なのだ。

そのまま門を通り過ぎようとした円を、女性の声が引きとめる。

「あの！」

周りを見渡すが、円のほかに人はいない。ということは、自分に声をかけたのだろう。

「はい、なんでしょう？」

円は余所行き用の、少し高めの声を出し、にこやかに女性に向き直る。

「鬼灯円様ですね？」

「え、ええ……」

「私は葛葉と申します」

につこり、と葛葉と名乗った女性は円に笑みを向ける。

「はあ……」

相手が自分の名を知っていることに警戒し、身構えた円に葛葉は困ったような表情を浮かべる。

「あの、どうか警戒なさないでください」

「……」

そう言われると、ますます警戒してしまうものだ。

逃げたほうがいいだろうか？ 迷う円の手を葛葉が掴む。

「離して！」

咄嗟のことに恐怖を感じて叫ぶ円に、葛葉は真摯な瞳を向けた。

「私は怪しい者ではありません」

「言っておくけど、十分怪しいわよ！」

「旦那様の命であなたをお迎えに来たのです」

「どこの旦那様よ!？」

（もしかして、遊郭の旦那様とか言うんじゃないでしょうね!？

あたしのこと、売る気?）

その想像に、眩暈めまいがする。

しかし、葛葉の発した答えは、さらに眩暈を増長させるものだった。

「雨竜家の当主、雨竜蒼様でございます」

「……」

雨竜家の屋敷の第一印象は、とりあえずでかいということ。でかくて、豪華。

我ながら稚拙な感想だと思っけれど、緊張やその他諸々で、そんなことしか円は考えられなかった。（覚悟を決めたと言っても……）さすがに、前置きなしというのは反則なのではないかと思う。

ここへ円を連れてきた葛葉にうろたえている様を見せて舐められたくはないので、表面上は平静を保っているが、内心かなり混乱していた。

（だって、結婚の話聞いたのは昨日よ！？）

昨日の今日でご対面とは、いささか急すぎではないだろうか。それとも、世間一般ではこれが普通なのだろうか……？ なにせ、円はそういったことには疎いのでよくわからない。

一応、円が結婚を了承した時点で許嫁になった（……のだろうか？）人に家へと招待されたのだから、断るのも失礼かもしれないし……と葛葉に着いて来てしまったのだが、はたしてそれでよかったのか。

（もしかしたらこのまま輿入れとか。——いや、さすがにそれはないか）

などと考えているうちに、屋敷の敷地内に足を踏み入れていた。ずいぶん立派な庭をぐるぐると歩かされて、目が回りそうだ。

（これ、ひとりだったら完璧に迷ってるな！）

しばらくして、日当たりのいい場所に出る。

「ここでお待ちください」

「……え」

戸惑う円に構わず、葛葉は彼女を置いてさっさと姿を消してしまふ。

広大な庭の片隅に、円はひとりで取り残されてしまった。

「なんなのよ、もう」

なんだか、自分がひどく場違いな気がした。

それは屋敷の規模の大きさに気圧されているだけでなく、この場所の空気がどことなく冷たいからだろう。円には屋敷全体が、ひどくよそよそしく感じられた。

（——なんでかな）

気を紛らわせるため、円は近くに咲いている花をじっと眺めている。

どれくらいの間そうしていたのか。ぼうつとしていた円の耳に、突然物音が飛び込んできて、彼女はびくりと身を震わせた。

「……っ」

人の気配に後ろを振り向くと――

（う……わ……――）

人が立っていた。儚げな立ち姿の……美しい人。どこか陰をまとったその人に魅せられて――呼吸をすることすら忘れてしまいそうになる。

目が、合った。

「……あ」

太陽の光を浴びて、その人の瞳が青く輝く。

（き、れい――……）

だけど、さみしそう。

その瞳に見つめられると――

わからない。わからないけれど、なんだか胸の奥がぎゅっとなつて苦しくて……、切なくて……。

（目が……、逸らせない）

「…………」

「…………」

お互いに無言のまま見つめあう。

永遠にも一瞬にも感じられるその時間の中で、円の中の何かが――確かに変わった。

唐紅の章2（後書き）

円の能力がお披露目になりました！

そして弥生ママと安明パパは何かを知っているようですが？
最後に出てきた人物はいったい誰なのか？

次回に続く！！

唐紅の章3

ふたりの間に満ちた、不思議と穏やかな沈黙を破ったのは円と相対している人物の方が先だった。

その人は、はっとしたように円から視線を逸らすと、

「……こつちへ」

と、円を庭のさらに奥深くへと誘う。

「は、はい！」

慌てて後ろをついて行く円は、彼女を先導して歩く人物に微かな違和感を感じる。それが何か自分でもわからないままにしばらく歩を進めると、庭の木々に囲まれ、ひっそりと佇む東屋が見えた。

東屋の周りには春の花々が咲き乱れ、どこか温かい雰囲気や円に与える。その感覚は、この屋敷に入ってから彼女が初めて感じたもので、円はほっと息を吐いた。

しかし、気が緩んだその瞬間、不覚にも木の根に足を取られてしまふ。

「——きゃっ」

「……！」

転ぶ！ 地面に激突する衝撃に備え、目をつむる。しかし、いつまで経っても身体に痛みは感じられない。

「……？」

そり、円は閉じていた目を開ける。

彼女の目に映ったものは――

端正な顔が、その瞳が……、心配気に円を見下ろしていた。

（ち、近い……！）

咄嗟に離れようとするが、身体をがっしりと掴まれていて身動きができない。

そこで、円は気づく。

（助けて……くれたんだ……）

「あの、ありがとう……ございます」

朱に染まった顔を見られたくなくて、俯きながら礼を言う。

「……いや」

やっと拘束は外れ、円の身体は自由になる。

ほっとすると同時に、円は離れていく熱を寂しく思った。

（な……んで……？）

自分の思考に戸惑う。

（……て、いうか！）

自分を支えた力強い腕。そして図らずもよりそってしまった件の人物の胸元。それに、澄んでいるけれど少し低めの声――。

次の瞬間に閃く衝撃の事実！

「――男！？」

びし、と円に指をさされ、今さっきそうだと気づいた男性はわずかにたじろぐ。

「……そうだけど」

答える声は微かに固い。

その反応に、さすがに無作法だったと円は慌てて指を下した。

「ご、ごめんなさい！」

「いい。……慣れてるから」

そう言いながらも、その表情は拗ねているようだった。

（なんか、かわいい）

ふふ、と思わず笑みを零してしまう円に、男はますます拗ねたような視線を向ける。

（なんだ……。こういう顔もするんだ）

正直言って、きれいだけれど人形のように無機質だと感じていたのだが――。

（そんなこと、ない）

目の前の青年が急に色彩を帯びた気がして、いつきに親しみを覚えた。

笑ったまま動こうとしない円に痺れを切らしたのか、彼は円の手

を取り、そのまま東屋まで連れていく。

その手は微かに震えていて――

「……？」

不思議に思っ、円は自分よりも幾分上にある顔を見上げた。

その、顔は……

少しだけれど。本当に、少しだけ……赤く、染まっ、て……。

思わず、自分まで繋いだ手を意識してしまい、頬に熱が集まるのを感じた。

（あと少し。東屋までなんだから……）

それまでは、このまま。

繋いだ手に、円はそつと力を込めた。

――結局。

ものの数分もかからずに東屋までたどり着き、繋いでいた手はあっさりとはどかれてしまった。

不思議なことに、それを残念だと円は感じていた。

そして、さらに不思議なことに、円と男は東屋に設置された卓を挟んで向かい合いながら座っている。

（えーっと。なんだろう、この状況は）

そもそも、自分は雨竜家の当主に呼ばれたのではなかっただろうか。その当主はいつ出てくるのだろうか？

（もったいつけないで、さっさと出てきなさいよねー）

内心文句タラタラだが、それはもちろん表に出さないのが淑女のたしなみというもの。

仕方がないので、目の前で優雅にお茶の準備をしている若者を観察することにした。

長めの前髪からは、妖の血が入っているからだろう、日の当たり具合で青くきらめいて見える瞳がのぞいている。鼻筋はすつと通っていて、薄めの唇はほんのり紅く染まっていた。茶器を操る指も白

くて長い。歳はわからないが、成人は迎えているだろう。

（完っ璧な美女！……よね）

初対面でコレが男だなんてわかる人がいるだろうか？ 絶対にいい。いたとしたら、会ってみたいものだ。

しかしこんなにも容姿が整った美人を見てしまうと――。これでも中身はともかく見た目には少々自信があつたのだが、その自信は脆くも崩れ去ってしまう。

（だけど――）

この人物は何者なのか？ 先ほどから気になってはいたが、なかなか聞き出せないでいる。

「どうぞ」

ことり、と茶器が円の目前に置かれる。それを行儀よく手に取ると、一口、口に含んだ。

「……！ おいしい！」

今まで嗅いだことのない芳醇な香りが口の中で広がり、甘い味が舌を楽しませる。

満面の笑みを浮かべた円に、青年も蕩けそうな笑みを見せた。

（う、わ……。これは反則！）

ばくばくと心臓がうるさく騒ぎだす。

そんな円の様子には気づかず、彼はますます笑みを深めた。

「よかった。――君は、甘いものが好きだって聞いていたから」

「え、誰に……」

しかし、円の質問は途中で遮られてしまう。

「はいはい、いい雰囲気のところごめんよー」

突如現れた人物に、円はぎよっと身を引いた。

「だ、誰！？」

「……みつひで 光秀」

青年の低めた声に彼の方を窺うと、先ほどまでの笑みは引っ込んで、氷のように冷たい視線を現れた男に向けていた。

（こ、こわ……）

思わずたじろぐ円だったが、光秀と呼ばれた人物はさして気にした様子はない。

「そんな目で睨むなよー。ほら、お茶菓子持ってきてやったんだぞ！」

「頼んでない」

「なんだよう、俺のせつかくの氣遣いを」

「……」

怒る氣も失せた、といった体で黙り込む青年を尻目に、光秀はにこにこ笑っている。そして、円をじーっと眺め――

「君が円ちゃんかー」

「……はい」

「かわいいね」

にこり。女好きのしそうな顔を緩め、円の手を取ると、その甲に口づけを落とす。

「こんな奴ほつといて、俺と仲良くしない？」

「光秀！ー」

青年は立ち上がると、光秀の腕を引っ張り、強く握りしめた。それはもう、ぎりぎりと……。

（痛そー……）

そんなことを思いながらも、円はますます混乱していた。

そして、突拍子もないことを思いつく。

（……このふたりつてもしかして……）

もしかして、もしかするのだろうか？

名前を知らない青年は今までの人生で一度も見たことがないくらい整った顔だだし、光秀という男もなかなかのものだし……。

（そういう趣味の男性もいるって聞いたことあるし――）

円はお目にかかったことはないが、世の中にはいわゆる衆道しゅどうと呼ばれる、男色家たちがいるという。

「あの！」

思い切って口を開いた円に、ふたりの視線が注がれる。

「おふたりは……その……、ご当主様の、お妾なんですか!？」
聞いてしまった……。ときどきしながら返事を待つ円。
男性陣の反応はというと――

「……………」

「……………」

――絶句。

その次の瞬間、辺りに響き渡る光秀の笑い声。

「ぶっ！ はは……あはは!! 円ちゃんサイコー」

笑い転げる光秀の横で、もうひとりの青年はむっつりと黙っている。

「……? ……??」

戸惑う円に光秀が語る衝撃の真実――。

「君の言うご当主様っていうのはコイツのことだよ」

「……え？ あの、え？」

「この男は正真正銘、雨竜家の当主。――雨竜蒼だ」

（あの、御冗談ですよね？）

信じられない思いのまま、円はつい先ほどまで女だと勘違いしていた人物を見つめる。

すると、彼は――こくり、と……確かに頷いた。

なんだか、泣きたくなってくる。

「うそでしょ――!!!!??」

円の絶叫が響き渡った。

唐紅の章3（後書き）

明かされる衝撃の真実！
円はびっくりですねー

唐紅の章 4

「あたし、帰ります」

なんだか騙された気分だった。

（この人が当主だったなんて……）

先ほどまで蒼に抱いていた親しみも、今は感じられない。

「え、円ちゃん？」

光秀が止めるのも聞かず、円は東屋を飛び出した。

ただ蒼から遠く離れたくて、ひたすら走る。息がきれてきてようやく立ち止った。

「ここ、どこだろ」

気づけば、全く知らない場所に出ていた。感情のままに走ったので、ここが屋敷のどこら辺に位置するのか見当もつかない。

「もう、やだ……」

円はどちらかという方向音痴なのだ。ひとりでは、この庭を抜られないかもしれない。

急激な心細さに襲われた円は、思わず泣きそうになる。

しかし意地っ張りな彼女は、泣いてたまるか！ と目に力をこめてやり過ごす。

（右か…、左か……）

それとも、いつそのこと明らかに道ではない方へと突っ切って行ってしまうのか…などと物騒なことを考えたした円の手を誰かが掴む。

「きゃっ」

——蒼だった。彼は、静かな瞳で円を見下ろす。

「な、何……。放して」

「俺は、何か君を怒らせるようなことをした？」

その瞳同様、静かな口調で彼は問う。

「別に、何も……」

そうだ、蒼は何もしていない。円が勝手に当主は中年男だと勘違いしてただけで、それが実は超絶美形でしかも若かったことに、驚きはしても彼女が怒る義理はない。

（本当は……、ちょっとだけ嬉しかったし）

そう。当主が目の前の青年だと知った時、円は一瞬、嬉しいと感じたのだ。しかし、その気持ちはすぐにしぼんでしまった。

蒼は円の能力が欲しいのであって、円自身を望んでくれているわけではないのだから……。

「あたしの他に、何人くらいの奥様を囲っているのかしら？」

再び盛り上がってきた涙を嫌みでこまかす。

——と、腕を掴む力が強くなった。

「君だけだよ」

「……え？」

「君だけだ」

（——な、んで……）

雨竜家の当主というだけでも、寄ってくる女は星の数ほどいるだろう。それに加えここまでの美貌があれば、異国に存在するというハーレムという物だって、簡単に作れてしまうのではないだろうか。……」

黙り込んだ円の態度をどう解釈したのか、蒼はそのまま円の手を引いて歩きだす。

どこへ向かっているのかと円は聞きたかったけれど、なんだか口を開いたら負けのような気がして黙っていた。

しばらくすると緑の生い茂る庭を抜け、やわらかい地面ではなく、石畳の道に出た。その先には、品のいい造りの門が見える。

（なんだ。ちゃんと帰してくれるんだ）

このまま家に帰してもらえないのでは……と少しだけ不安だったのだが、そんな心配はしなくてもよかったようだ。

「……いいの？」

「何が？」

「こんなにあっさりとあたしを帰しても。ここに呼んだのは、何か用があつたからじゃないの？」

「うん……」

しばしの沈黙。蒼は円に向き合つた。

「会いたかつたんだ、君に……。会つて、話がしたかつた」

とくん、と心臓が跳ねた。

どうして、こんなに優しい口調でそんなことを言うのだろう。

（そんな風に言われたら――）

嬉しい。嬉しくてたまらなくなってしまう。

「なんであたしなの？――他人の借金背負つてまで、なんであたしが欲しいの？ そんなにあたしの能力が気に入った！？」

こうして優しくされたり、見つめられたりするのがたまらなく苦痛で、円はまくしたてる。

「違う！ 俺は――」

蒼は何かを言おうとして、止める。

（何よ……。言いたいことがあるなら言いなさいよ）

凶星だから、何も言い返せないのだろうか。そう思うと、なんだかすごく悲しい。

ふたりの間に重苦しい沈黙が落ちる。

「――蒼様？ 円様も」

円にはその声が天の救いに思えた。

「……葛葉」

蒼も内心ほつとしているようだった。彼のそんな様子に、胸が微かにきしんだ。

（何よ……。駄々をこねる子供の相手なんて、してられないってこと？）

「葛葉、彼女を家まで送つてくれ」

「はい」

蒼が円から手を放し、葛葉へと彼女を預ける。

「……」

門から敷地の外へ出る間も、葛葉に連れられ乗った馬車の中でも、円はずっと無言のままだった。

蒼は去っていく円の後姿をただ黙って見つめていた。彼女を引きとめたい衝動に駆られたが、じつと堪える。

（会いたかった――）

ずっと、会いたかった。

円の傷ついたような表情を思い出すと胸が痛む。あんな顔をさせたいわけではなかったのに。

だけどお茶を飲んだ時は笑ってくれたな、と思う。

（もう一度見たいな……。あの子の、笑った顔）

「まど、か……」

小さく、彼女の名を呼んでみた。その響きは、この世で最も美しいものだと、蒼には思えた。

「ただいまー」

「あらお嬢様、おかえりなさいませ」

円が玄関をくぐると女中のお登世（とせ）が迎えてくれた。

自邸に戻り、ようやく一息つく。

「なんか、疲れた……」

「まあ！ 疲れは美容の大敵ですよ。お風呂の準備ができていますので、湯船に浸かってゆっくり疲れを取ってくださいな」

「うん、そうさせてもらう」

着衣を脱いで長い髪を頭の上でまとめると、円は浴槽にゆったりと浸かった。

ふう、と大きく息をつく。

そうしてぼんやりと蒼のことを考えていた。

よく考えたら、こうして毎日の生活が普通に回っているのは蒼の

援助のおかげなのだ。

（それなのに、あたし……）

ちよつと言い過ぎたかな、と反省する。家族以外の前ではいつだって、感情をコントロールすることはできていた。それなのに——
「なんであんなに腹が立つたんだろ」

かりにも雨竜家の当主にあそこまで失礼な態度をとってしまったことは、円の気持ちを今さらながらに落ち込ませた。

「ああ……」

円の無作法さが原因で今回の縁談は流れるかもしれない。

（いくら能力がよくつても、こんなに生意気な娘はいらん！　みたいな……）

そうなったら、鬼灯家は……円はどうなるのだろう。それこそ、円が身売りをしなければならぬような状況になってしまうのだろうか。

「それは嫌だなあ」

結婚をするより嫌だ。遊女になるだなんて——。

というか……、この結婚がなくなるのが嫌だ……思っている自分がいる。

その思いは円を非常に戸惑わせた。

何故、あんなにも怒りがこみ上げてきたのか——本当は、わかっている。

蒼がしたことは、遊女を客が買うのと同じだ。円の千里眼を雨竜家はお金で買ったのだ。

だけどきつと……雨竜の当主が見ず知らずのおじさんだったなら、あんなに腹は立たなかった。彼だから、嫌だったし、腹立たしかった。蒼に金で買われたという事実が、円は悲しかったのだ。

「変なの」

あたし、変……。

自分の中に芽生えてしまった気持ちが何なのか、円は目をつむって気づかないふりをした。

唐紅の章 4（後書き）

蒼は完璧に円が好きですよね……。
だけど、それは何故なのか？
次回は蒼の過去が明らかに！！

唐紅の章 5

風呂上りの喉を冷たい水で潤おし、縁側で火照った身体を冷ましている――

「湯冷めしちゃうわよ」

「お母様」

弥生が円の隣にそつと腰を下ろす。

「あなた、若い娘がそんな格好ではしたない。誰かに見られたらどうするの」

白地に朱模様の入った単衣の寝間着。その襟のだけを弥生が慣れた手つきで整える。

「ウチの使用人は気がきくから、見て見ぬふりをしてくれるわよ」

「この家ではそれでもいいけれど、お嫁に行ったらそんなこと言ってられないわよー」

「お嫁……か」

途端、沈んだ娘の様子に弥生はあらら……と苦笑を浮かべる。

「今日は、雨竜家に招待されたんですってね」

「なんで知ってるの？」

「ご丁寧に、あちらからその旨を書いたお手紙を持った使者が来たから……」

「そっか」

「ええ」

しばらくの間、木々のざわめきがその場を支配する。やがて円が伏せていた目を上げ、母に向けた。

「雨竜家の当主と会って……、話をしたの」

「そう。――どうだった？」

「すごくきれいな人だった。想像と違って、若かったし」

「ええ、彼ってとっても素敵よねー」

「知ってたの!？」

円の眼差しがきつくなる。

「私を責めるのはお門違いよ。お母様は一言も、相手が不細工な年寄りだなんて言ってますからね！　あなたが勝手に勘違いしたんでしょ」

「う……！」

確かにその通りなので、円は反論できない。気を取り直して、話を続けた。

「その人が、妻はあただけだって……」

「確かに、彼に妾がいるって話は聞いたことないわね」

「でも……！　奥さんがいなくなった、恋人はいるかも……」

うなだれる円に、弥生は優しい目を向ける。

「——気になる？」

「そ、そんなこと！」

「もしかして、好きになっちゃったのかしら」

弥生の言葉に、円の頬がかつと赤くなる。

「そんなわけないでしょ！　だってあの人は……」

威勢は最後まで続かず、言葉は尻すぼみになった。

「あの人は？」

「あの人は……、借金のかたに結婚を申し込んできて……。そんなの、脅しじゃない。お金であたしを買ったってことでしょ？」

「本当にそうかしら」

「……どういうこと？」

「さあねー」

さて、と言って弥生は立ち上がる。

「早く部屋に戻りなさいね」

それだけ言うと、彼女はさっさとその場を後にしてしまう。

「なんなのよ、もう……」

円はそんな母の後姿を呆然と見つめることしかできなかった。

「円、どうだった？」

夫婦の私室に弥生が戻ると、安明が焦れたように訊ねた。

「うーん。まあまあ……ね」

弥生は先ほどの娘の様子を思いだし、答える。円は蒼のことを気にしているように見えた。

「そうか！　よかったなあ」

弥生の言葉を聞き、安明は安堵の息を吐く。

「いやー、めでたい！　娘を手放すのは惜しいが蒼君にならないだろう」

「あなた、喜ぶのはまだ早いわよ」

「そ、そうかな？」

「そうよ！　円は素直じゃないし……、蒼君は口下手でしょう？」

道のりは長いんじゃないかしら」

「そうか……。円は今日初めて蒼君に会ったようなものだし、お互いを知るにはもう少しかかるかあ」

「そうね。……だけど」

弥生は安明に意味深な視線を送る。

「恋に時間は関係ないわ！　私は初めて会った瞬間から、あなたしかいないってわかってたわよ？」

「……弥生！　俺もだよ！！」

娘のことはそっちの気で、鬼灯家の夫婦は長い夜を楽しんだのだ。つた。

——翌日。前日とは比べ物にならないほどの沈んだ気持ちで、円は朝を迎えた。

そわそわとしながら袴の着付けを済ませると、お登世の元へ向かう。

「あら、お嬢様。おはようございます」

「おはよう。……あの、今朝は何か郵便物が届いているかしら」

「郵便物ですか？　奥様宛てに園芸会の方から葉書きが届いてましたけど……」

「それだけ？」

「ええ、どれだけです」

「……そう」

安堵したような円の様子に、お登世は訝しげな顔をする。

「どうかされたのですか？」

「え！　うつん、別に……」

それ以上追及される前に円はいそいそとその場を後にした。

お登世の姿が見えなくなったところで――

「……ふう」

円はそつと息を吐き出す。

（雨竜家からは何も来てないみたいね）

もしかしたら、破談の書状が送られてくるかもしれないと危惧していたのだが――

「――よかった」

気を取り直して、円は学校の準備に取り掛かった。

――放課後。沈みがちな気持ちをなんとか浮上させようと、円は市を訪れていた。

定期的に催される市には、食材から服、小物に至るまで、様々な物が所狭しと並べられている。

店先の商品を冷やかしながら、だんだんと気分が上昇していく。

（あ、あの簪かわいい。……こっちのもの）

あっちへふらふら、こっちへふらふら。そうして歩いているうちに、だいぶ市の端まで来てしまったようだ。

そろそろ帰ろうか…と考え出した円の肩にぽん、と手が乗せられる。

「……！」

びくつとしながら振り返った先にあつた顔は、円が知っているものだった。

（……あ。えーっと……）

「光秀…さん？」

昨日、雨竜家の屋敷内で会った人物に間違いない。円の顔が緊張でこわばる。

そんな円に、光秀は人懐こい笑顔を向けた。

「そんな顔しないでよ、円ちゃん。雨竜家の使いとかじゃなくて、ここで会ったのは偶然だから」

「……偶然？」

「そ、ぐーぜん。偶然ついでにそこでお茶でも飲んで行かない？」

光秀が示した先には、そこそこ人が入っている団子屋があつた。

「え、でも……」

「いいから、いいから」

戸惑う円だったが、光秀に強引に誘われてつい了承してしまう。

そしてその団子屋で十目の団子を口に頬張っていると――

「――よく食べるねえ」

乗り気ではなかったわりに次々と団子を吸いこんでいく円の食欲に、光秀はやや驚いたような感嘆の声を上げる。

「あ、すいません」

奢りだと言う光秀に甘えて、つい食べ過ぎていた。

「いや、いいよ。円ちゃんがおいしそうに食べてくれるなら、俺もうれしいし」

さらに、と光秀は女性が喜びそうな台詞を吐く。

（この人……。昨日も思ったけど、やっぱり軟派だ）

女の扱いに慣れていて、顔もいい。これはモテるだろうな…と円は想像した。

「……？ 何？」

気づかぬうちに見つめてしまっていたようだ。円は慌てて視線を逸らす。

そして、気になっていたことを訊ねてみた。

「あの……、光秀さんはどういった身分の方なんですか？」

「俺はねー、蒼の従者ってところかなあ」

「え……。従者……」

それにしても態度がでかすぎではないだろうか。昨日も蒼と対等に話しているように見えた。

（……呼び捨てだし）

不審げな円の視線を受けて、光秀は肩をすくめて見せた。

「あいつとは、幼馴染みたいなものだからさー」

光秀が言うには、十二歳の時に会って以来の付き合いらしい。腐れ縁なんだよねーと彼は笑う。

そして、ふと真剣な眼差しで円を見つめる。

「——ちよつとだけ、昔話をしてもいいかな？」

「……どうぞ」

光秀の瞳に気圧され、円はこくりと頷いた。

「ありがと」

にこつと笑ってみせる光秀に、円はほつとする。

「あいつ……、蒼がさ、なんであの若さで当主の座についているのか円ちゃんは不思議に思わない？」

「え……」

それは、確かに。そう言われると、急に気になりだす。

「何か、特別な理由があるんですか？」

「うん」

光秀はそこで少しの間言い淀むと、意を決したように口を開いた。「もちろん、あいつの能力が人並みはずれて強かったのもある。だけれどその能力は開花するのが遅かったんだ——」

そこから先、光秀の語る話は平平凡凡な生活を送ってきた円にはあまりに現実味がなかった。

昔、ひとりの美しい娘がいた。そして彼女には将来を近い合った恋人がいたが、その恋は儚くも引き裂かれてしまう。何故なら——

娘が力ある男に見初められてしまったからである。

その娘が蒼の母、千代子^{ちよこ}だった。そして、千代子を見初めた男が、当時雨竜家の当主だった雨竜孝弘^{たかひろ}。

孝弘は千代子を深く寵愛し、常に傍に置いた。そしてすぐに千代子は子供を身ごもった。やがて誕生した男児は蒼と名付けられ、大切に育てられたのだ。――しばらくの間は。

蒼が生まれ数年が経っても、彼は能力を示さない。当主はひとつの疑問が浮かんでくるのを止められなかった。

――蒼は本当に自分の子なのか？

千代子には恋人がいた。自分が無理やり引き離してしまった男だ。もしかしたら、蒼はその男の子なのではないか。自分の――妖の血が入っていないから、蒼は能力を発動しないのでは？

疑惑は日々大きくなり、孝弘の千代子に対する寵愛は薄れていった。元はただの町娘の千代子にはたいした後ろ盾もなく、孝弘の寵愛がなければ雨竜家に彼女の居場所はない。

さらに、孝弘は元来の好色で、屋敷には千代子の他にも本妻を含む五人の妻たちがいた。その妻たちも数人の子供を生んでいて、その子たちは皆力の差はあれど、生まれつき異能の力を備えていた。いよいよ疑念は増すばかり。やがて千代子と蒼は母屋を追い出され、離れに移される。

そして、ふたりの存在は忘れ去られ――

「そんな時、事件が起きたんだ」

そこまで話し、光秀が一呼吸置く。

「……事件？」

光秀の話に引き込まれていた円は、早く続きが聞きたくて彼を急かす。

そして、光秀は再び口を開く――

自分の生んだ子が雨竜家の当主になれば、自分の将来、そして実家も安泰。そう考えた妻たちの壮絶な家督争いが始まったのだ。

互いが互いを牽制し合い、それはもはや嫌がらせという段階を越

え殺し合いにまで発展した。

「たくさん、死んだの？」

円は自分の声が震えているのを感じた。

「たくさん……ていうか、みんな、かな……」

それぞれに暗殺者を雇ったり、互いの杯に毒を盛ったり……等々、様々なことが行われたという。その結果はというと——相打ちだった。

ほんのわずかの間に、当主は五人の妻、そして跡取り全員を失ってしまったのである。——ひとりを除いて。

「蒼は、ある意味運がよかったのかもな」

世にも壮絶な事件が最悪の幕引きを終え、雨竜家は混乱の極みに立たされていた。そんな時、ひとりの少年が類稀なほどに強い能力を開花させたのだ。

——蒼だった。

人々から忘れ去られていた末の息子。彼は一気に注目的になり、そのままあっさりと後継ぎの座に収まってしまったのだ。

しかし、もしも能力がもつと早くに目覚めていたなら——

蒼は真つ先に、権力を求め身を破滅させた女たちの抹殺の対象になつていただろう。能力の開花が遅れたから助かった命。けれどそれで、彼は幸せだっただろうか？

蒼が能力に目覚め、孝弘は久方ぶりに千代子の存在を思いだした。彼女を新たな本妻に迎えようと離れまで会いに行くと——

そこに、彼女の姿はもはやなかった。

「死んでたんだよ」

「死んで……た……？」

「そう。蒼の母親は元々身体が弱くてね……。離れに移つてすぐ、病気になるってそのまま……」

光秀は顔を俯け、必死に何かの痛みに耐えているようだった。

「だって、雨竜ほどの家なら、腕のいい医者だって……」

「……いたよ、もちろん。だけど、相手にされなかった。当主から

の寵愛が薄れた妾なんて、胡麻をすつても無駄だからね」

「そんな！……そんなの、ひどい」

「うん、ひどいね。だけど……、それが現実だ」

母の亡骸をまだ幼い少年はひとりで片づけたという。それからずっと、離れでじつと息を殺して生きていた……。

（そんなの……）

そんなの、ない。胸がぎゅっと絞られ、たまらない気分だった。涙を浮かべる円を見て、光秀が優しい微笑を浮かべる。

「君が、人の痛みをわかる子でよかった」

「……そんな。だけど、そんなにすごい事件なのに、あたし今初めて聞きました」

「それはそうだよ。こんな醜聞、広めちゃったら雨竜の恥だもん。ぜーんぶ、もみ消されてなかったことになっちゃったの」

あっけらかんと言いつつ放つ光秀の言葉に、円は改めて雨竜の力というものを感じた気がした。

「俺も、蒼から聞いて初めて知ったし」

「え」

「俺が初めて蒼に会った時にはもう、全てが終わってて……、あいつもすでに雨竜家始まって以来最年少の当主になってた」

「だけど、お父さんは？」

「蒼が跡取りに決まってからすぐ、亡くなっただけさ」

「……」

沈黙する円に、光秀は意味深な視線を寄こす。

「そこらへんは妙な噂があつてさ……」

「……？」

「蒼が、父親を殺して当主の座を奪ったとか何とか」

「え！？」

円は思わず大声をあげてしまう。

「信じる？」

光秀は何かを確かめるような口調で円に問う。円は――

「……わからない。あたし、あの人のこと全然…知らないから」

「じゃあ、こんな話聞いて蒼のこと怖くなった？」

「怖くは……ない」

「それは、蒼の昔話を聞いてかわいそうだって思ったから？」

（かわいそう……？ 違う、そうじゃない——）

円は力なく首を振る。そんな円の様子を光秀は目を細めながら窺っていた。

「かわいそうとかじゃなくて……」

円は、蒼の目を思い出す。その、どこか寂しそうな瞳を見つめた時、自分が感じた気持ち。そして今、蒼の過去を聞いて生まれた感情——。

（守って…あげたい……）

——抱きしめてあげたい。

——その瞳から、寂しさも悲しみも取り除いてあげたい。

——一緒に…いてあげたい。

違うな、と円は思う。してあげたいんじゃないで、自分がそうしたいのだ。

切ないほどに溢れ出す想いたち。たまらなく蒼に会いたくなった。

「あいつはさ……、笑わないんだよ」

「え……」

笑わない？ だけど——

「だけど、昨日は笑ってました」

「そう。それで、俺もびつくりしてさー」

そう言う光秀の顔はなんだか嬉しそうだ。

「蒼は過去にあんなことがあったから人間不信でさ、必要以上に人と関わらないし本音も見せない。俺のことは…少しは信用してくれて、感情だっけを見せてくれるけど……、でも笑ってくれたことはない」

蒼はほとんどの人の前ではほぼ無表情なんだよねーと光秀は困ったように言う。

「でも、あたしには……」

「うん、君だから……君だけに……じゃないかな」

「なんで——？」

「うーん。なんででしょう？」

そう言う光秀は答えを知っているように見えた。

「光秀さん、知ってるんでしょ……、なんですか」

「知ってるよ。だけどそれは、きっと俺の口から言っていることじゃない」

「じゃあ、誰から聞けばいいんですか？」

「それはもちろん、蒼から」

「だけど、そんなの……いつ会えるかもわからないのに」

そもそも、結婚の話はどの程度まで進行しているのだろう……。

「会いたいなら、会いに行けばいいんじゃない？」

「そんな簡単に——」

「簡単なことだよ。だって、きっとあいつも……会いたがってる」

……本当に？ もしもそれが本当なら、今すぐにでも会いに行きたい——。

「まあ、がんばって！」

光秀が気合を入れるように、円の肩を叩く。

（がんばって……）

——どうしたらいいわけ？

円は複雑な気持ちで天を仰いだ。

唐紅の章 5（後書き）

なんだか長くなってしまいました。
そのわりには蒼が登場してませんが……。

唐紅の章 6

光秀と別れ、円はひとり帰り道を歩いていた。

（……どうしよう）

円は迷っていた。

光秀が言うように、思い切って蒼に会いに行ってしまうのか……。

（いや、やっぱりそれはない！）

さすがの彼女にもそこまでの度胸はない。せめてお伺いをたててからにしよう、と決めると今度はどのように約束を取り付けようかと悩み始める。

「あたしって、こんなにウジウジした性格だったっけ？」

思わず苦笑。こんな風に、相手のことを考えるだけで一喜一憂する気持ちを円は今まで知らなかった。そんな気持ちを知ったことが妙に気恥かしくて……嬉しくて。

（わわ……あたし、何恥ずかしいこと考えてるの！？）

頭を振って、その思考を打ち消す。

——と、どん、と前方を歩いていた人の背中にぶつかってしまった。

「——！ ごめんなさい！」

「……いや」

慌てて謝る円の耳に見知った声が飛び込んでくる。その声の主が誰なのか理解し、彼女は固まった。

相手の方も自分の背中に突っ込んできた少女が誰であるかを察しただけ、その足を止める。

（——雨竜蒼……。こんなところで会うなんて……）

ふたりの間の気まずい雰囲気は打破すべく、円はとりあえず話題を振ってみた。

「あの！ きれいな夕焼け空ですね！」

「……うん」

蒼の微妙な反応に、円はいたたまれない心地になる。

(うつ、失敗した……)

——しかし。

「夕方が…一番好きだな。……落ち着くから」

「……え」

予想外に会話が続いたので、円は驚いて蒼を見つめた。蒼はほんのりとほほ笑みを浮かべながら円を見つめ返す。

「そう…ですね。あたしも夕方は好きです。……でも、少しだけ寂しい気持ちになりませんか？」

戸惑いつつ返した言葉に、蒼がほんのわずか小首を傾げ——

「今は君といるから……寂しくないよ」

花のような笑みを咲かせた。

きゅん、と胸の奥が甘く疼く。

「……あ」

しかし、その笑みはすぐにしぼんでしまう。

「……？」

どうしたのか、と円が目で問いかけると、蒼は潤んだ瞳を彼女に向けてきた。

「——昨日は、ごめん」

「え、何が？」

「君を…傷つけた」

「それは、あたしの能力がどうたらこうたら…のことですか？」

「うん」

蒼は傍目に見てもわかるほど、しゅんとうな垂れている。

「あの……、いいです。あたしも態度悪かったし……」

「違う！」

強い口調で否定され、円は目を丸くする。

「……あ、ごめん。そうじゃなくて…君が悪いんじゃない、俺がちゃんと説明すればよかったんだ……」

「説明って？」

いったい何の説明だろう。円は蒼の瞳を覗きこみ、その先の言葉を待った。

「君の能力を理由に縁談を申し込んだけど——それは建前っていうか、その……。雨竜家の重鎮を納得させるための嘘だったから」

「——え？」

「本当は千里眼なんてどうでもよくて……。君が欲しかった」
「……」

絶句。思わぬ展開に、頭の中が真っ白だ。そんな円には構わずに、蒼は言葉を続ける。

「あと、君のお父さんが博打で失敗したっていうのも嘘で……」

「！？」

「安明さんが借金の肩代わりってことなら、君が結婚を承諾するって言っから」

「ごめんね、と謝る蒼になんと声をかければいいのか円にはさっぱりわからなかった。

（——ていうか！）

「安明さんって！ お父様と知り合いなの！？」

「うん、聞いてない？」

「聞いてない！！」

（どういうことよ、お父様——！！）

明らかに機嫌の傾いた円を見て、蒼はもう一度、小さくごめんとつぶやいた。

円はそんな蒼を見て、光秀の言葉を思い返していた。蒼は感情をあまり表に出さないと言っていたが…今この時、蒼の表情はくると変わっている。

それはもしかしたら、円の前だから……。なのだろうか。

（本当に？ うぬぼれじゃなくて？）

決して他人には心を許さないという蒼。

けれど自分には……。許してくれている。様々な表情や言葉をくれる。

そんな蒼が円はたまらなく愛しくなった。

（まだ、会って二日目なのに……）

自分が恋に落ちてしまったことを円は認めないわけにはいかなかった。

蒼とふたり話しながら歩いていると、いつの間にか自宅の前まで来ていた。結果的に円は蒼に家まで送らせてしまったのだ。

とりあえず蒼の話を聞いてわかったことは、彼が自分のことを想ってくれている……ということ。

（どうしてなのかは知らないけど……）

そこらへんをもう少し詳しく聞きたかったので――

「あの、お父様と知り合いなら、家に寄っていきませんか？」

円は勇気を出して蒼を引きとめてみた。しかし、結果はあえなく玉砕。

「ごめん。これから三日月寮の会議があるんだ……」

非常に残念だったが、誘われた当人の方がさらに残念そうだったのでよしとする。

次はいつ会えるだろう。上目遣いに蒼を見やると彼もこちらを見つめていた。

視線がぶつかり、絡まって――

「もしも君が明日ひまだったら……、また会えるかな？」

「……はい」

明日は女学校が休みなのでちょうどいい。ふたりは再会の約束を交わすとやがて別れた。

家に帰って円がまずしたことは――

「お父様……！」

父の書斎に踏み込み、その胸倉をつかむ。

「よくも娘を騙してくれたわね！」

目を三角に吊り上げて怒る円に、安明は身の危険を感じて妻に助けを求めた。

「弥生ー！ 助けてくれー！」

切実な夫の叫びを聞き、弥生が書斎に駆け付けた。そして状況を見ると……

「あらら」

と一言。

「あらら、じゃなくて！ 助けて！」

「そうねー。円、お父様にそんなことしちゃいけないわよ」

「だって……！」

「放しなさい」

有無を言わせぬ弥生の口調に、円はしぶしぶと手を放す。母強し……。

「それで？ どうして円はそんなに怒ってるのかしら」

「そ、そうだと円！ 父さんにいきなりこんなことするなんてひどいじゃないか！」

安明の言葉に、円がキツと父を睨む。

「ひどいのはお父様でしょ！？ あたし、全部聞いたのよ！」

「え……」

「あら……」

夫婦はしばし、視線を絡ませ……。降参したように手を上げる。

「蒼君から聞いたのかー。いや、すまんすまん」

「すまんじゃないでしょ！ あたしがどれだけ悩んだと思ってるのよー！？」

「だって、こうでもしないと円が縁談を受けてくれないと思ったんだよー。なあ、弥生？」

「ええ」

頷く母に、円の怒りが募る。

「やっぱり、お母様も共犯だったのね！？ ひどいじゃない！」

「そうね。小細工したのは謝るけど、でも結果的によかったでしょ？」

「う。それは……」

「円が真実を知るのにはもう少し先かなーと思ってただけど、意外に早かったわね」

「蒼君との仲も急接近かな？」

「そうよねー。どこまで進んだの？」

「ちよつと！」

両親の冷やかしに円はいたたまれない気持ちになり、慌てて話題を変えた。

「お父様と蒼さんって、どういう関係なの？」

「うん、それはな……」

安明は一転、神妙な顔つきになる。

「それにはまず、蒼君の過去を話さないとな」

「あ、それは光秀さんって人に聞いた」

「ああ、光秀君か」

「どうやら、父は光秀とも知り合いらしい。」

「彼は、蒼君をよく支えてくれている」

などと言って、ひとりでうんうん、と頷いている。

「あなた、それはいいから——」

弥生に促され、やっと本題に入る。

「俺が初めて蒼君と会ったのは、彼が十の頃だったかな……。お前はまだ四歳だった」

「実は、蒼君のお母様と私はお友達だったのよ」

「え」

「彼女が亡くなったという話を偶然聞いてね。せめてお線香だけでも思つて、雨竜家を訪れたの。安明さんと一緒にね」

弥生は遠い過去に思いをさせ、懐かしそうに目を細めた。

「弥生にとって大切な人だと聞いていたから、俺も一緒について行つたんだよ」

「そこで、蒼君に会ったの。彼は千代子によく似た器量よしだったけど……」

弥生は言葉を切り、数度息を吸って、自分を落ち着かせる。

「目が……死んでいた。このまま放っておいたら、彼も千代子のように死んでしまう気がして」

「雨竜家の人々も蒼君には腫れ物に触るような扱いだったし……蒼君自信、彼らを自分に近づけようとはしなかった」

円は遠い日の蒼を思った。彼は今よりもっと、寂しげな瞳をしていたのだろうか……？

「私たちは蒼君をそのままにしておけなくてね……、あの子はすでに雨竜家の当主になっていたから家に連れ帰ることまではできなかったけど、頻繁に彼の元に通うことにしたの」

「雨竜家の面々も蒼君も、正直煙たがっていたけどなあ」

「そこは、名ばかりでも満月の身分が役に立って、追い返されることはなかったわ」

こんなにささやかな暮らしぶりでも、やはり鬼灯の名は伊達ではないのだと、円は妙に感心してしまう。

「何度も何度も蒼君を訪ねて……、季節もいくつか回ったころ、やっと蒼君が心を開いてくれてな」

「私たちが言うとおりにご飯もちゃんと食べてくれるようになって、血色もずつとよくなつてねえ」

「あの時は本当にうれしかったなあ」

ふたりは頬を緩めて当時を語る。きつと、彼らにしかわからない苦労や喜びがあつたのだろう。

「そんなわけで、蒼君は俺たちの息子みたいなものなんだよ」

「そんな蒼君があなたを好きになってくれて、私たちとっても嬉しかったの！」

「あの、ちよつと待って……」

飛躍する話に、円が待ったの声をかける。

「なんでそこで、あたしを好きになるの？ あたしたち、昨日初め

て会ったのよね？」

そこで、母がうふふと笑う。

「円は覚えてないだろうけど、前に一度会ってるのよ。……覚えてない？　あなたが八つの時の夏祭りを——」

夏祭り？　その単語を聞いて、何かが円の頭の隅をかすめる。

そう、確か……、いつかの夏祭りで円は迷子になったことがあった。

「俺は夏祭りに行ったことがないって言う蒼君を連れて屋台をめぐつてなあ、お前は母さんと一緒に盆踊りに参加してた」

「いきなり知らない男の子と一緒にだと円が驚くし、蒼君もけっこう人見知りが激しかったから、私たちはそれぞれ別々に行動してたの」
「だけど……と母が苦笑いを浮かべた。

「ちよーつと目を離れたときに円がいなくなっちゃって」

「父さんも同じく」

ふたりの話では、はぐれた子供を探しているうちに弥生と安明はたまたま合流し、そのまま夫婦で血眼になって円と蒼を搜索したらしい。

「それが祭りの終盤あたりで、ひょっこり円たちが現れて……」

「あの時は驚いたなあ。円と蒼君が一緒だったこともそうだが、蒼君が円の手を引いて——笑ってたんだからな」

「ええ」

感慨深げに夫婦は目をつむる。幼き日の蒼の笑顔を思い浮かべているのだろうか。

「蒼君は私たちに心を開いてはくれたけど、笑った顔は見せてくれたことがなかったの」

「それが、円に会ってから俺たちにも少しだけ笑顔を見せてくれるようになって。本当、円のおかげだ」

「……」

円は複雑な気分だった。自分がその時のことを覚えていないことがくやしかったし、蒼が両親とはいえ、自分以外の人に笑みを見せ

ることに微かな嫉妬を覚えた。

（だけど、なんで――）

「どうして、あたしたちはそれ以来会ってないの？」

おかしいではないか。夏祭りで円と蒼が仲良くなったのなら、その後も交流があってもよさそうなもののに――。

「蒼君が会えないって言うんだよ」

「私たちはあなたに会ってあげてって、言ったんだけど……」

「お前のことが好きで大切すぎて、どう接したらいいかわからないって言うんだ」

「――え……」

それはどういうことだろう？　好きなら会いたいと思うのが普通なのではないか？

円の思いをくみ取ったように、安明が続ける。

「こんな言い方は何だが……蒼君は普通の環境で育っていないんだ。

人との距離の取り方がわからなくて不安だったんだよ。……円を傷つけるのが怖かったんだ」

「蒼君は繊細で不器用な子だから……。今はだいぶ成長したけれど、それでも根本的な弱さは変わらないのだろう。蒼の儚げな印象はそこからきているのだと円は思った。

「それでも、蒼君は時々円の様子を見にこの家まで来てたんだぞ？

――直接お前に会うことはなくても、いつだって円のことを想ってたんだ」

「どうしよう……、あたし……」

すごくうれしい。涙が出そうなほどにうれしかった。

「夏祭りのすぐ後に、蒼君がいきなり円を嫁にくれって言うてきた時はさすがにびびったけどな！」

がはは、と笑いながら言い放つ父の言葉に円は驚く。

（そんなに昔から、あたしのことを……）

「でも、その言葉がやっとなんか真実になりそうで嬉しいわねー」

「まっただだ！」

ずっと昔から、円だけを一途に想い続けてくれた蒼。

蒼のその気持ちも、自分の中に芽生えた想いも大切にしたい……。
円はそっと目をつむり、ここにはいない恋しい人を思った。

唐紅の章 6（後書き）

今回は円が自分の気持ちとちゃんと向き合うお話でした。

それにしても、蒼の乙女化がハンパないですね……。

他の人の前でのきりつとした彼もちゃんと書いてみたいです！

唐紅の章 7

自室に戻ると、円は袴を脱ぎ小袖の着流し姿になる。

暗闇に沈んだ部屋に灯りも点けず横たわる。

（なんだか、胸がいつぱい……）

父と母から聞いた話が、いつまでも頭の中をぐるぐると回っていた。

夏祭りの夜、蒼と円の間にいったい何があったのか――。

訊ねたら、彼は教えてくれるだろうか？

（早く、会いたい）

会って、昔の出来事やこれからのこと、そして何よりも自分の気持ち、蒼に伝えたかった。

「――！？」

突如、急激な痛みが円を襲う。頭が割れそうなほどに痛かった。

（これ、は……）

声も出ないほどの激痛。この感覚に、円は覚えがあった。これは能力が発動する前兆――。

（来る……！）

ぐわ、と何かに身体が飲み込まれたかのような感覚が円を襲う。

目の奥で目まぐるしく場面が変わり――やがて止まる。

円は薄灯りの点った部屋に立っていた。もちろん、実際にその場にいるわけではない。円の身体は依然として自室に存在するはずで、意識だけが遠くへ飛ばされてしまったのだ。千里眼は映像が流れ込んでくる……というよりも、その能力が映し出す場面に円が紛れ込むというようなものだった。

（ここは、どこ……？）

辺りをぐるりと見渡すが、この場所がどこであるかを指し示すような物はない。

ここがどこかは知らないが、このままじっとしていればやがて能

力は収まり、元の部屋へと戻れるだろう。

いつものことなので別段焦ってはいないが、知らない場所に意識だけでもあるというのは、正直あまり気持ちのいいものではない。

部屋の中でじっとしているのも暇なので、ちよつとした探検を試みることにする。

廊下でばったり人に会っても、円の姿は相手には見えないのだから咎められる心配もない。

意を決し、円は自分の正面にある障子を開けて部屋の外へと飛び出す。

すると、長く続く廊下が現れた。とりあえず、その廊下の先を指してみる。

円が優雅な足取りで歩いてても、当然廊下は物音ひとつたてない。廊下どころか、この屋敷全体がしんと静まり返っていた。

（……ちよつと不気味ね）

人が出てきたら出てきたで驚くのだが、誰もいないとかえって不安になるものだ。

突き当たりまで来ると、今度は左右に廊下が伸びていた。

（右……左……やっぱり右！）

あまり当たらない自らの勘に従って、右側の廊下を進む。しばらくして、左手に灯りの点った部屋が見えてくる。そこから微かに、人の声が漏れ聞こえてきた。

本当はそんなことをする必要はないのだが、気持ち的に円はそおつと、抜き足差し足で部屋の前へと近づく。

襖に耳を寄せるが、話の内容はよく聞こえない。

（しょうがないなー）

えい！ と円は襖に頭から突っ込んだ。彼女の身体はするり、と襖を通り抜け、部屋の中へと入る。

（こういう時は便利なんだよね）

部屋の中には六人の男たちが顔を突き合わせ座っていた。一番奥に座っている男がその中でも高位なのだろう……偉そうにふんぞり返

っている。

(う…わ…なんか怪しい雰囲気…)

なんの相談をしているのだろうか。興味を引かれて、円は一団にさらに近づいてみる。

ぼそぼそ…という話し声がしだいにはつきりとした言葉で円に届く。

「……それは真か!？」

男のひとりが驚きの声をあげ、偉そうな男を見つめる。

「うむ、確かな筋の情報じゃ」

「そんな……」

あちこちで戸惑いの声が上がった。

「鬼灯家の当主め」

吐き捨てるように言われた言葉に、円の身体がびくりと反応する。

(今、鬼灯家って……。当主ってお父様のこと?)

何故、自分の父親のことがこんな怪しい集団の話題に上がっているのだろう。円はますます耳をひそめた。

「雨竜家の当主と自分の娘を婚姻させるとは考えたな……」

「これで、勢いが削がれていた鬼灯一門も宮廷での力を再び取り戻すでしょうな」

「『満月』同士で婚姻を結ぶとは……。ただでさえあいつらは帝の傍近くに仕え、邪魔な存在だというのに」

「これ以上、あやつらに力を持たせるのは危険です」

「そうだ、我らの身が危うい」

語られている内容に、円は驚愕する。

(……そんな)

蒼と円の結婚は、そんな風に権力を求めるためのものではなくて

(お父様だって、そんなのが欲しいわけじゃない!)

蒼のことを心から案じていた父。そしてふたりの結婚を喜んでくれたのは、それがきつと、蒼にとっての…そして円の幸せに繋がる

と信じてくれたからだ。

（あたしだって！）

最初は家のためにしかたなく了承した結婚。だけど今は違う。自分の意思で、これから先の未来を蒼と共に歩いて行きたいと思っている。

（蒼さんが…蒼が…好きだから——）

初めて、言葉にして思う。自分は蒼のことが好きなのだ。

「——玉山^{ぎょくやま}」

偉そうな男が、それまでひとり黙って座っていた髭面の男を呼ばわる。

「なんでしょう」

玉山という名の男は丁寧な口調で応じた。その瞳は獲物を見つめるかのごとく鋭い。

「鬼灯と雨竜が手を結ぶのを黙って見過ごすわけにはいかないのだ」

「はい」

「だからな、玉山。お前に始末をしてほしいのだよ」

「——誰をでしょう？」

「雨竜の当主は手ごわいと聞くが……、なあに、小娘ひとりを消すくらい、お前にはわけないだろうて」

円は肌が泡立つのを感じた。男の言葉もそうだが、玉山が一瞬、彼女の方に視線を投げかけたように見えたのである。

（小娘って……）

もしかしなくても、この男は円のことを言っているのだ…と理解できた。

「どんな手をつかってもいい。——わしの期待に応えてくれるな？」

「はい、必ずや」

玉山が慇懃に頷くと、その場の空気は一気に和やかなものとなる。杯に酒が注がれ、それが各自に回されていく。

「我ら陰陽寮^{おんみょう}に——」

玉山が乾杯の音頭をとった。

「陰陽寮に！」

皆が後に続き、乾杯の音が上がるとぐっと酒を飲み下す。

（陰陽…寮……）

ぐらり、と視線がぶれる。

（あ……—）

意識が飛ばされた時同様に、激しい頭痛、さらに耳鳴りがした。ぐにや…とその場の景色がゆがみ—やがて、意識が再び身体に戻っていくのを円は感じる。

「……っ」

しばらくの間、頭がぼうつ…として、身体が自由に動かせなかった。やっと靄^{もや}が晴れ、円はのそりと立ち上がる。

これからどうするべきか整理がつかないままに円は部屋を出る。

玉山と呼ばれたあの男の—冷たい瞳が頭から離れなかった。

唐紅の章7（後書き）

円の千里眼が発動！

一気にファンタジーな雰囲気になりました！

唐紅の章 8

「お父様に知らせなきゃ……」
混乱する頭で考える。

どうすればいい？ まさか、自分の命が狙われるなんて……。
ふるえる身体を叱咤して、父の元へと円は向かった。

——しかし。

「！？」

突如、身体が固まる。再び身体が動き出した時、それは円の意思とは裏腹に玄関へと向かって歩きだした。

（何！？ 身体が勝手に——）

止まれ！ と強く念じてても、身体は一向に円の命令を聞く様子はない。それならばと大声で叫び、家の者を呼ぼうとするが……声も出ない。

（こ、これは……）

まさか、と円は思う。玉山と呼ばれたあの男——いるはずのない円を見つめた気がしなかったか？

玉山には自分が見えていた——？

そんなはずはない。そんなことが……あるはずが……。

しかし、今の自分の状況はどうだろう。あの薄暗い部屋で玉山と視線を交わした一瞬の間に、呪いをかけられたとしか思えなかった。これほどの力があの男にあったとは——。自分の迂闊さに、円は今さらながらに後悔する。

（そう、陰陽寮と言っていたわ）

ぼくせん

陰陽寮とは天文・気象・暦・時刻・卜占などを司る役所で、陰陽道を極めた者たちが属している。中にはかなりの力を持ち、妖を使役し意のままに操る陰陽師もいると聞く。

陰陽寮は妖の退治も専門としている。彼らにとって三日月寮とは似て異なるもの。帝に近く位置し、妖を祓う点でも多大な功績を上

げる三日月寮、そして満月は陰陽寮にとって邪魔な存在なのだ——。
表だつての諍いいさかはないが、水面下ではかなりの小競り合いをしている……と叔父おじに聞いたことがあったと、円は思い出す。

円と蒼の婚姻は陰陽寮にとって、あまりいい事態ではないのだろう。満月の家同士のつながりが強くなることは、引いては三日月寮の勢いも増すことになるのだろうか……？

円にはこの結婚にそこまでの効果があるようには思えないのだが、実際にそうなるかどうかはともかく、そのように感じた陰陽師がいたことが問題なのだ。

(このままでは本当に……殺されてしまう……)

円の身体はすでに家の敷地を抜け、暗がりの道をふらふらとさ迷っていた。

まさかここまで早く玉山が仕掛けてくるとは思わなかった。円暗殺の命令を受けたのはついさっきだろうに、随分と行動が素早いではないか。

(せっかちな男は女にもてないのよ……！)

胸中で精一杯の強がり言ってみるが、恐怖は薄れない。

自分の身体はいつたいどこへ向かっているのか——。

暗闇に沈む道に突如、灯籠が点る。

(……？)

牛車だ。しかし、車を引いているはずの牛の姿がない。何か、目に見えないものに引かれた車が——円の目の前で止まった。

する、と簾すだれが上がり、女の白い手がそこから覗いた。その手招きに誘われるまま、円は華やかな装飾を施した牛車へと乗り込む。

円の後ろで簾が再び閉じた。車の中には円と——青白い肌をし、五衣いつしきに身を包んだ女とがふたりいるばかり。

からから……と牛車は動き出す。

「もう、お口は利けますよ」

女ははんなりとした口調で言う。

「あ……」

女の言うとおり、声が出ることに円は気づいた。しかし、頭が真っ白で何を話せばいいのかわからない。そんな円の様子を見て、女はふふ…と小さく笑う。

「わたくしの名は園絵^{そのえ}。…玉山様の式神でございます」

「……玉山！」

やはり、そうなのだ。円は愕然とした面持ちでその名を聞いた。

「この牛車はいったいどこに向かっているの？」

震える声を必死に抑え、園絵に訊ねた。

「はて……、どこでしょう？」

園絵はいたずらっぽくほほ笑むと、御簾越しに天高く昇る月を見上げた。

「——今宵は満月ですね」

つられて円も月に目を凝らす。まん丸く輝く月は確かに形が満ちていた。

（…この女、本当に式神？ 生きているようにしか見えない……）
じ、と円は園絵を窺った。

「玉山様は、あなたを殺す命令が下されるのを随分と早く占^{うら}にて知っていたのです。そして綿密な準備をしていた……」

「準備？」

「ええ、彼の計画の条件は今宵全てそろったのです。あなた様は知っていますか？ 満月の夜は妖の力がことさら強まることを」

「——」

嫌な予感がする。円は自分の背中を冷や汗が伝っていくのを感じた。

恐怖に引きつる円の顔を園絵が悲しそうに見つめる。

「かわいそうな方……。玉山様が命令を賜るのがあと一日でも遅かったなら、次の満月までは生きていられたのに……」

園絵の言葉に、この牛車が向かう先は自分の死そのものなのだと…円は気づく。

「……やだ」

もう、声に涙が混じることにも構っていらなかった。

「——鬼灯家はかつて仲間を裏切り人に下った鬼の末裔。恨みを持つ妖はたくさんいるのです」

「そ…んな……」

自分は妖の餌にされてしまうのか？

絶望の淵に立たされた円の脳裏に浮かぶのは——やはり蒼の顔だけだった。

唐紅の章 8（後書き）

円ピンチですね。

ちなみに、今さらですが現在蒼は二十二歳、円は十六歳の設定です。

唐紅の章 9

ぴくり、と身体が反応した。

「――黒波^{くろなみ}？」

蒼の呼びかけに応えるように、漆黒の鱗に身を包んだ一匹の蛇が暗がりから這い出てくる。

蛇はチロチロ…と舌を覗かせながら主人である蒼を見上げた。

黒波は蒼が隠密用に使っている蛇である。今は円の傍につかせていたはずだが……。

（……まさか）

円の身に何かあったのか？

黒波は忠実な僕^{しもべ}だ。蒼の許可なく円の傍を離れることなどありえない。――緊急時以外は……。

「黒波、何があった」

逸る心を抑え、蒼は報告を求める。

しゅー…と小さく鳴く黒波。常人には決してわからない蛇の言葉を蒼は理解することができた。それも、彼の持つ能力のひとつなのだ。

「な、に……？」

黒波の話を聞き終えた蒼は愕然とする。

円が何者かに操られるようにして牛車に乗り込んだ。そして――
「牛車は月見山^{つきみ}に向かっているんだな？」

間違いない、というように黒波は頭^{くち}を垂れる。

月見山は帝都の東に位置する大山だ。何故、円をそこに……？

まったくもって、嫌な予感しかない。

（俺があの時誘いを断らなかつたら――）

状況は変わっていただろうか？

蒼は昼間に見た円の顔を思い出す。蒼が真実を告白すると少しだけ怒った顔もしたけれど、結局は許してくれた。

蒼は円に拒絶されなかったことがたまらなくうれしかったのだ。

(……円)

もし、自分が彼女を失ったのなら、どうなるかわからない。

円は蒼にとつての希望そのもの。

生も未来も何もかもを諦めていた蒼にできた大切な存在。

どんな物にも心から執着できない蒼にとって、たったひとつだけ欲しいと願うもの……それが、円。

かつて、蒼にとって世界はひどく色あせて見えていた。汚くて醜くて……希望なんて何もないその場所で、何故自分が息をしているのかわからなかった。

周りは全て敵だと思い込み、誰も信じることができなかった蒼。そんな蒼にもやがて信じたいと思う人ができた。安明や弥生の優しさに彼は救われたし、決して口にはしないが光秀のことは友人だと思っている。他にも何人か好感を持てる人はいた。

——それでも……、やっぱりこの世は蒼にとって息苦しい場所ではなかった。

だが、ひとりの少女に出会い世界は変わる。それまで色あせていた世界が、急に色づき始めた。円の息づくこの場所で、自分も生きていたいと思った。

何度、円との未来を夢見ただろう。それがもうすぐ手に入るのに

「失ってたまるか！」

蒼は大急ぎで馬に跨ると、疾風の勢いで駆けだした。

円は幾度となく脱走を心みるも、呪に縛られた身体は言うことを聞かず、ただ焦りばかりが募っていった。

「……無駄ですよ」

園絵が非情に囁く。

(怖い……怖い怖いっ！)

今までの人生の中でもおそろく最大であろう恐怖が円の心を占める。

心の中で助けを請うも——無論、誰も助けになど現れない。そうこうしているうちに、牛車は心なしか速度を落とす。

園絵が簾を手で押し上げ、外の景色を円に見せる。——巨大な山がそこにあつた。

「月見山です」

「月見……山……？」

「そう。今宵の満月にあやかつて、あそこを選んだのです」

玉山様は風流なお人ですから……と園絵はうつとりとした口調で添える。

「あの山まであと数分で着きます。あなたはともかわいらしい方だけど、玉山様の望みですもの……。お別れも仕方ありませんね」

（仕方ないって……）

そんな言葉で片付けないでほしい。

円にとっては、全然仕方のないことではないのだ。

蒼との結婚に裏があるのではと勝手に勘ぐられ、勝手に暗殺計画を練られ、やっぱり勝手に殺される——。そんなことに、納得などできるはずがない。

（諦めない！）

自分の命をこんな場所で消すことなどできない。まだこの世には、円を望んでくれる人がいるのだから……。

（お父様……お母様……蒼さん）

大切な人の名を唱える。そうするだけで、胸の奥に勇気の火が灯った気がした。

（あたしは——生きて帰る！）

円が決意を胸に刻んだその時——車輪が鈍い音をたて……止まった。

唐紅の章9（後書き）

これからは、更新が少し遅くなるかも……。。

唐紅の章 10

牛車が止まることが何を意味するのか、円は瞬時に悟った。

（着いてしまった……）

恐怖に強張る身体。その身体は園絵に促され、牛車を降りる。ひやり、と夜風が円の頬を撫でた。

「——こちらです」

園絵が手に焰ほむろを灯して円を先導する。身体はやはり、勝手にその後へとついて行く。

整備されていない山道を園絵も円も滑るようにして登った。

（操られていなかったら、絶対転んでるな）

今まさに殺されようとする一歩手前だというのに、不思議と円の心は落ち着いていた。

——何故だろう？

——わからない。

耳を澄ませば、誰かが自分の名を呼んでいる気がした。それは空耳だと理解しているのに、円はその声の主が誰なのか知りたくなる。

（お父様？）

いいえ、違う。

（お母様……かしら）

それも違う。

（それなら——）

蒼さん？

応える声などない。それでも、きっと蒼が自分を呼んでいるのだという根拠のない自信が円の中で湧きあがった。

きっと彼が来てくれる。そんな予感が円を勇気づける。

（……どうしてだろう）

蒼は円のこんな危機的状況など知る由もないのに。

——来てくれる。

——来るはずがない。

ふたつの思いが揺れる。

「お願い…来て」

この状況から救ってほしいとか、助けてほしいというのは二次で……。

……ただ、会いたいから。蒼の顔を見たいから。

「蒼、さん」

そつと呟く言葉は闇の中に溶け…消える。

この想いは彼に届いただろうか——？

散々山道を歩かされ、頂上に着いた時には円の息は完全に上がっていた。

もしも自分の意思で身体を動かせたなら、とつくに根を上げていたところだ。

（まったく……、どれだけ重労働を強いるのよ）

それでも、お嬢様育ちなのに……。

それにしても、あれだけの大山を登りきるにしては、随分と時間がかからなかった気がする。

もしかしたら方術を使っていたのかもしれない。

そんなことをつらつらと考えている円の身体に、園絵が縄を被せる。

「ちよつと！ 何してるのよ！？」

慌てて声を上げるが、そんなものは聞こえていないかのように、

園絵は黙々と円の身体に縄を括りつけていく。

そうして、円は近くの岩へと身体を縛りつけられてしまった。

一仕事終えた園絵はやつと口を開く。

「この山の頂上に着いたら、玉山様の呪いは解けてしまいましたので……」

「えっ！」

まったく気づかなかった円はぽかん…と口を開けて園絵を見上げる。

（逃げ出す絶好の機会を逃した……）

鈍感な己に腹がたつが、もうどうしようもない。
生きて帰るといふ誓いもどうやら果たせそうにない……。

このまま、諦めるしかないのか？

天を見やると、随分と近く月が見えた。

手を伸ばせば届いてしまいそうなほどに……。

その時——夜の山に咆哮が響き渡る。獣…ではない。聞いたこと
もないような、獰猛で、何かに飢えている声だった。

「な、に……？」

「やっと、来たようですね」

円が園絵を見つめると、彼女はぽつりと「鬼ですよ」と言った。

「鬼！？」

「……そう。お仲間に会えてうれしいでしょう？」

「仲間って……」

確かに、円には鬼の血が入っている。だが、円は人間だ。純粋な
鬼に会ってうれしいはずがない。

木をなぎ倒すような音が響いてくる。その音は、だんだん近づい
て来ているようだ。

ずん…という鈍い音をたて、近くの木が倒れた。

「……！」

やがて、暗がりから姿を現したのは一匹の鬼。青白い肌は薄く光
を放っていた。瞳は落ちくぼみ、口からは鋭い牙がむき出しになっ
ている。

『その女が、鬼灯家の娘かあ！』

荒々しすぎて、うまく聞き取れない声で鬼は言う。その問いは園
絵に向けられているようだった。

「そうです」

園絵は鬼を前にしても全く顔色を変えず、超然とした様子で立つ

ている。

『そうかあ』

鬼は円をじつと見つめ——『おいしそうだなあ』にやりと笑った。
円はぞつと背中が寒くなる。

食われる。そう思った。

巨大な身体を揺らしながら、鬼は円へと近づいてくる。

『お前は邪魔だなあ』

そう言つと、右手で何かを払いのけた。

何か——園絵を……。

ぐしゃり、という聞いたくもない音が耳に飛び込んでくる。

(……え)

見たくはないはずなのに、見てしまう。

今まで園絵が立っていた場所には——真つ赤な鮮血が……。
しかし、しばらく経つとその血は跡かたもなく消え去った。

『なんだあ、今の女は人間じゃあないのかあ』

鬼は残念そうに呟くと、再び円に視線を向ける。

『お前、名前はあ？』

「……円」

震える唇から、なんとか言葉を絞り出す。

『まどか……かあ。いい名前だあ。それにお前……美人だなあ』

鬼は不躰な視線を円に這わせると、何かを迷うように沈黙した。

円はただ呆然と鬼を見つめているしかなかった。

鬼を……妖を見たのはこれが初めてのことだった。

帝都には妖が入り込めないように強力な結界が張っており、円はその帝都から出たことはない。他の主要な町にも、帝都ほどではないがそれなりの結界があり、ほとんどの人はその生涯で妖に遭遇することはないまま天寿をまっとうする。

けれど時には——今の円のように不運にも妖に遭遇し……食われる者もいる。

(あたしも——食べられるの……?)

圧倒的な強者を前にして、円の心は折れてしまった。ここから逃げ出すことはおろか、身じろぎする勇氣すらない。

『お前……』

急に話しかけられ、身体がびくりと跳ねた。

『お前、俺の嫁になれ』

「——え」

突然の申し出に、円は混乱する。

『裏切り者の鬼の血が混じった娘なんぞ、ずたずたにして殺してなあ……食べてやろうと思ってたんだが……惜しくなったあ』

鬼はにやりと、口の端を歪める。

『お前はおいしそうだあ。だけど、食うのはもったいねえなあ』

「……」

『なあ、円あ——』

「気安くその名を呼ぶな！」

その時響いた、剣の切っ先のように鋭い声。

鬼も、円も……その声のしたほうへと目を向ける。

「あ……」

まさか、本当に……。

声の主を探し当てた途端、円は急激な安堵で、足がくず折れそうになる。

「蒼……さん……」

息を吐くように細い円の声。しかし、その声が届いたのだろう。

蒼は円を見てそつと笑んだ。

『誰だあ、お前』

鬼がその声に怒気をにじませて、蒼に迫る。

「俺は彼女の夫になる男——雨竜蒼だ」

鬼の迫力に負けじと、蒼も冷たい眼差しで鬼を睨みつける。

「——くだらない横恋慕はやめてもらおう……円は俺のものだ」
『なんだとお！』

鬼の手が蒼に伸びる。

「蒼さん！」

「……大丈夫」

悲鳴を上げる円に、鬼へ向けていたのとは真逆の、柔らかな視線を蒼は送る。

その言葉のとおり、蒼はするりと鬼の手をすり抜けた。

『このお！』

躍起になる鬼を次々とかわしながら、蒼はいつの間にか円のすぐ近くまで来ていた。やがて、円の目の前まで近づいた蒼は、円を鬼からかばうように、異形の妖と対峙する。

円には、蒼の背中しか見えない。それでも、その背中にたまらない安心感をもらう。

ゆらり、と蒼の背から何かが立ち上った。

深い青色をしたそれは、蒼と円を包み込むように広がる。

『なんだあ！？』

鬼は戸惑いの声を上げ、後ずさる。

円は、蒼の背に妙な既視感を覚えていた。

（あたしは、この背中をどこかで——）

……見たことがある。

目の前で行われている蒼と鬼の攻防にも構わずに、円の意識は遠い過去へと飛んで行った。

唐紅の章 10 (後書き)

久しぶりの投稿です。

飽きられていないといいいのですが……。

唐紅の章 11

小さくて、女の子みたいに華奢な背中。

その背に守られ、円はただ怯え、泣いているしかなかった。

あれは――そう…遠い夏の出来事……。

「お母様ー！」

幼い円は人ごみの中、必死で母を呼んだ。しかし、呼びかけに応えてくれる人はいない。堪らない心細さが円を襲う。

「……お母様ー」

もう一度、今度は涙で頬を濡らしながら母を呼ぶ。それでも母は現れなかった。

（……どうしよう）

こんなに外は真っ暗で、人だってたくさん。円には再び母に会える自信がなかった。

今宵は夏祭り。出店がそこかしこに並び、狐の面や真っ赤なりんご飴、ふわふわの綿菓子などを売っている。

円にとってはどれも珍しい物ばかり。繋いでいたはずの母の手を知らぬ間に放し、ひとりさ迷っていたようだ。

じつと小さな己の掌へと視線を落とす。そこには、つい先ほどまで感じていたはずの母の温もりはない。

じわ…とまた涙が溢れだす。

涙のせいではやけた視界のまま、円は当てもなく歩く。そうして歩いているうちに、なんだか腹が立ってきた。

（お父様のせいよ！）

自分がこうして迷子になってしまったのは、父である安明のせいだ…と円は理不尽にも思う。

随分前から、家族三人で夏祭りに行く約束をしていたのに……。

それなのに、安明は昨夜になってから急に行けなくなったと言いだしたのだ。

（お父様の…嘘つき……）

金魚をすくってくれるって…、りんご飴も…綿飴だって買ってくれると言ったのに……！

父に対する猛烈な怒りが湧きあがってきて、涙は引っ込んでしまふ。しばらくは怒りのままにずんずんと通りを練り歩いていたが、時間が経つと怒りも冷め、再び心細い思いになる。

「お母様……」

円の小さなその声は、すぐに周りの喧騒にかき消されてしまった。

——その時。

「おおっと！」

ひとりの酔っ払いが大きくふらつき、円の方へとその身体をよるめかせた。彼はそのまま円にぶつかる。

「きゃあ……」

円は男の重さに耐えきれず、派手に転んでしまった。

（痛い）

夏祭りのために特別に仕立てた浴衣の裾から膝を覗かせる。提灯の明かりで照らされたそこは、血が赤く滲んでいた。

「うう……」

なんだか何もかもが嫌になって、円は顔を歪ませた。

今にも泣きだしそうな円を見て、ぶつかった男が慌てて謝罪してくる。

「ごめんね、お嬢ちゃん……。ああ、怪我しちゃったのかあ」

まいったなあ…と呟く男は、頭を掻きながらへらへらと笑っている。

（……この酔っ払い！）

それが謝る態度か！と円はきつと男を睨みつける。

男はその視線を受け、おお恐い…と言いながらやはり笑っていた。「そのままだと黴菌が入っちゃうからねえ、近くの井戸で傷口を洗

おうか……」

そう言つと、男は強引に円を立たせ、人ごみから離れた。明りが届かないほど遠くまで来て、円は不安になる。

「おじさん……、手…放して」

男の手からすり抜けようとした円の小さな手。しかしそれはがっしりと掴まれ、男の手から逃れることができなかった。

（……何？）

この人怖い…と円は思う。しかし、そのことに気がつくには少々遅かった。

「お嬢ちゃん、かわいい顔をしてるねえ」

その言葉に、円は男の顔を見上げる。その顔はだらしく緩み、男の目は怪しい光を放っていた。

「……」

恐怖で身がすくむ円の身体を男は無遠慮な手で撫でまわす。

悪感が身体を支配する。

「嫌！ 誰か助けて！！」

掠れた声で円は叫ぶ。恐怖で引きつる口からは、呂律の回らない言葉が幾度もこぼれ出す。

「無駄だよ…。こんな所に誰も来やしな……」

——ごっツ。

鈍い音がして、円を拘束していた力が弱まる。その隙に、円は男の手を逃れ、数歩後ずさった。

何が起こったのかと戸惑う円の視界に、黒い影が飛び込んでくる。

「……あ」

月の光を浴び浮き上がるその影は——少年の姿をしていた。

円よりは年上であろう彼は自らの背で円を庇い、悪漢の前に立ちふさがっている。

彼は自分を助けてくれようとしているのだろうか？

だが、男の子にしては華奢なその身体では、大人の男に勝てるとは思えない。

「……逃げて」

震える唇で円は少年に囁く。

円の声を耳にした少年は、ちらり…と視線だけ彼女に寄こした。深く――吸い込まれそうな青の瞳。闇に浮かびあがるその瞳は、円にはひどく奇異に見えたはずなのに、不思議と恐いとは思わなかった。

「このお……」

よるめきながら立ちあがる暴漢。その手は頭を押さえている。おそらく、少年に石でも投げつけられたのだろう。

「このクソガキ……！」

怒りに燃える男の目。円は背中がぞくりとした。

しかし、そんな男の形相にも少年は少しも怯まない。

男が腕を振り上げ、少年を殴ろうとする。円は思わず目をつむった。一秒…二秒……数秒経ったが、聞こえてくるはずの殴打の音はない。

そろり…と円は片目だけ開ける。

「……！」

驚いた。視線の先には鼻血を出して地面に倒れている男がひとり。少年は冷たい瞳でそれを見下ろしながら優雅に立っていた。

「どう…やって……」

パクパクと口を動かす円を無感動に見やると、少年は黙って身を翻す。

円は咄嗟に、少年の浴衣の袖を強く掴んだ。

「待つて……！」

すがりつく円に、少年は胡乱げな眼差しを向ける。

「何」

冷たい声。円は委縮しつつも、この手を放すわけにはいかないと力を込める。

「あたし…迷子なの」

だからなんだ、と少年は無言の威圧をかけてきた。

「ひとりにしないで……」

ひとりぼつちは嫌だ。……怖い。ひとりでこの暗がりやさ迷い歩くぐらいなら、目の前の無愛想な少年と一緒にいるほうがまだましだ。

円はじ……と少年の目を見つめる。

やがて、彼は根負けしたように円の視線から目を逸らした。

——少年は溜息をひとつ。

そうして、すっと手を伸ばすと円の手を絡め取る。

「……君、名前は？」

「——円」

少年の手をきゅっと握り返しながら円は答える。

「俺は蒼」

「あおい……？」

「そうだよ」

少年——蒼は円の手を引き、遠くに見える祭りの明かりを目指して歩き出した。円は黙って蒼の横で足を動かす。

ふたりの間に広がる沈黙を何故か心地よいと円は感じていた——。

唐紅の章 11 (後書き)

過去編、まだ続きます。

唐紅の章 12

少年——蒼と共に、円は再びにぎやかに屋台がひしめく場所へと戻った。

ひとりではない。その安心感からか、急に空腹を覚える。

くう…と小さくお腹が鳴った。もちろん、祭りの騒がしさの中ではそんな音は蒼には届かないだろうけれど、円は羞恥から頬を赤く染める。円も恥じらいというものを覚える年頃なのだ。それも、こんな美少年に対してならばなおさらだろう。

そんな円の目に屋台に売られている焼き鳥の姿が飛び込んできた。
(おいしそう…！)

蒼の顔をちらりと盗み見る。蒼は周りの屋台になど目も向けていない。このままでは、焼き鳥屋の前も素通りしてしまうだろう。

それは困る。非常に困る。

「あの！」

勇気を出して、円は声を上げた。

「……？」

蒼の目が円に向けられる。そこには相変わらず感情は宿っていないが、冷たさも感じられない。円はほっと息を吐いた。

「あれ、食べたい」

円の指さす方向に蒼は視線をやると、ああ…と呟いた。

「お腹減ってるの？」

「……うん」

「じゃあ行こうか」

焼き鳥の屋台の前まで行って、そのまま自分の袖から金を出そうとする蒼を円は慌てて制す。

「お金なら、ちゃんと持ってるから！」

そう言って、円は巾着からかわいらしい模様の付いた財布を取り出す。母がもしもの時のためと言って持たせてくれた物だ。

迷子だというだけでも迷惑をかけているのに、さらに奢ってもら
うことなどできない。

「あの……、蒼……さん？」

呼び方に困る円に「呼び捨てでいい」と蒼は言う。

「じゃあ、蒼……はお腹減ってない？ 蒼の分も買おうか？」

円の言葉に蒼は少々考えてから、

「わからない」

「え……。わからないって？」

「自分が空腹なのか、そうでないのかわからない……。食べなくても
平気だと思うから、俺のことは気にしないで」

「気にしないでって……」

空腹かどうかかわからない？ そんなことがあるのだろうか……。

円は蒼の腹を見る。出っ張ってはいないから、少なくとも満腹で
はないのだろう。それならば――

「おじさん、焼き鳥二本ちょうだい」

円は店員に声をかけ、焼き鳥を二串購入した。かなり大きな肉を
刺した、一本でもなかなかの量がある焼き鳥だ。

二本買ったうちの一本を円は蒼に渡す。

「これ食べて」

「……」

円の強気な視線に促され、蒼は一口、肉を口に含む。

「おいしい？」

「……たぶん」

蒼のなんとも頼りない答えに軽く失望しながら、円も焼き鳥を頬
張った。

「おいしい……！」

なんだ、おいしいじゃない。円は安堵する。

もしかして、蒼は味もよくわからないのだろうか。それとも、蒼
は舌が肥えすぎて庶民の味など理解不能なのか？

（そつえば、育ちがよさそうな……）

どこことなく高貴な雰囲気を持ち合わせている気もする。

「ねえ、蒼は何をおいしいと思うの？」

これで高級食材を答えたら、完璧にお坊っちまだと思いつながら円は質問する。

「……」

蒼はしばしの沈黙。やがて出た答えは――

「わからない」

「――え」

予想外だった。円は戸惑う。

そんな円の戸惑いを察したように、蒼はぽつぽつと話し出した。

「小さい頃から、食べることに執着がなかったし。必要最低限に栄養を摂取できるくらいの食材があれば、それが何かとか……、味がどうかはどうでもよかったから」

「そんな……」

そんなのって、おかしい。だけど、蒼の理屈に反論できるだけの言葉を円は持っていなかった。

（それなら――）

「あたしが教えてあげる！」

「何を……？」

「どういう物がおいしいっていうのか！」

そう言うや否や、円は蒼の手を引っ張り、屋台巡りを始めた。蒼は戸惑いながらも円に付き従う。

「これはりんご飴！ 甘くておいしいのよ？」

これは焼きそば、綿あめ、たこ焼き……と、円は財布の中身が空になるまで蒼に物を食べさせた。

やがて蒼はもう無理……と円の袖を引っ張る。

「お腹いっぱい？」

「多分ね。こんなにたくさん食べたことなかったから、ちょっと気持ち悪い」

「じゃあ、あそこで休みましょう」

石段へと腰を下ろすと、ふたりは夜風に髪をなびかせた。

「ねえ、あたしがあげた食べ物おいしかった？」

「……ごめん。やっぱり、よくわからなかった」

「そう……」

円は肩を落とす。そんな円の頭にぽん…と蒼が手を置いた。

「……………」

顔を上げた円の視線と、蒼の視線とが絡み合う。

「味はわからなかったけど……、楽しかった。ありがとう」

「……………」

その言葉だけで十分だと円は思う。円に向ける視線や雰囲気がつと優しくなっているのを彼女は感じていた。

満面の笑顔になった円につられるようにして、蒼の目元が緩み、笑みを形作る。

「あ……！ 笑った！」

「え……………」

円の言葉に反応し、蒼はすぐに笑みを引っ込めてしまう。

「ねえ、もう一回笑ってよ」

「そんなこと言われても……………」

——その時。

大きな爆発音とともに、夜空に花が咲いた。

「わ……あ……、花火」

円はその一瞬の煌めきに目を奪われる。毎年父と母と見ていたけれど、蒼と見る花火も悪くない……それどころか、今までに感じたことのない高揚感を円にもたらした。

円の横で蒼がぼつりと呟く言葉が聞こえる。

「きれいだ……………」

円はその言葉に応えるようにうん…と頷いた。

きつと、今まで見てきた中で一番きれいな花火だ。これから先——来年も再来年もその後もずっと、隣に座る少年と共に花火を見たいと円は思う。

円は夜空から視線を外し蒼を見た。いつの間にか蒼も円を見つめていた。

自然と頬が緩むのを感じる。応えるように蒼の顔にも笑みが広がってゆく。

その笑顔がこの世の何よりも尊い物のような気がして円は願う。

——この先もずっと、彼が笑顔でいられますように……。

初めて会った時から感じていた、蒼の寂しさを背負っているような暗い影。鋭く尖ったような雰囲気は、蒼が自身を守るために着込んだ鎧のよう。

もしも、自分がその鎧を脱がせることができたなら……。

もしも、蒼の傍にすることができるなら……。

——彼を幸せにしたい。

幼い少女に芽生えた小さな願いと想い。

その記憶を天高く浮かぶ月だけが知っていた。

唐紅の章 13

夜闇を切り裂くような激しい咆哮ほうこうで円の意識は現実へと戻ってくる。

咆哮の主は醜く顔を歪めた鬼だった。暗闇の中で目を凝らすと、鬼の腕が無くなっていることに気づく。さらに身体中から血を流し、鬼は地に倒れていた。

「……！」

驚いた円は咄嗟に蒼の手にすがりついた。すると、蒼もしっかりと手を握り返してくる。

（ああ……）

何故、忘れていたのだろうか。青く煌めくあの瞳も、この手の温もりも。円にとって、とても大切なものだったのに――。

夏祭りの夜に一度だけ会った少年。父の知り合いのようだったから、いつかまた会える日を待っていた。ずっと待っていたはずなのに、美しい思い出は忙しく過ぎていく日々に埋もれてしま……。

（だけど、思い出した）

幼い日の記憶。あの時感じた蒼の優しさ温もり。そして――

（なんだ、あたし……、とつくに恋に落ちてたんじゃない……）

蒼が円に恋したという夏祭りの日、円も蒼に淡い恋心を抱いていた。

その気持ち
が恋だと
幼い自分
は気づけ
なかつた
けれど、
いまなら
はつきり
と分かる。
あの日、
蒼と過ご
して円は
初めての
恋を知っ
たのだと。

「……蒼」

敬称を付けずに彼の名を呼ぶ。あの日のように。

蒼の目が鬼から逸れ、円に向けられた。

「蒼」

先ほどよりもはつきりと蒼の名を呼ぶ。

「まど……か……?」

戸惑う蒼の瞳を円は真っ直ぐに見つめた。

「やっと会えた。やっとまた……。ずっとあなたを待ってたのよ」

「……!」

蒼の長い睫毛が震える。

「思い出したの、あの日のこと。……初めて蒼と会った、夏祭りの夜を」

「あ……!」

うまく言葉を発せない蒼に、円は抱きすくめられる。痛いくらいのその抱擁に、円も渾身の力を込めて応えた。

「好き」

円は自分の声が震えているのに気づく。抑えがたい気持ちの波が溢れて止まらなくて……。

「蒼が、好き」

夏祭りの夜、蒼に恋をした。その想いを忘れてしまっても、やっぱりまた彼に恋をした。そんな自分が堪らなくおかしくて、愛しくて、円は満面の笑みを蒼に向ける。

「円……。俺も君が好き、だ……。初めて会ったあの日からずっとずっと君だけが……」

「……うん」

互いに、自然と身を寄せ合った。そしてそのまま——月に見守られ、ふたりは初めての口づけを交わす。

（あつたかい……）

胸が堪らない愛しさで熱くなる。

触れあった唇から、蒼の強い想いが流れ込んできた。自分の気持ちも、蒼に伝わればいいと円は思う。

何故か、涙が出た。熱い雫が頬を伝い、滑り落ちていく。

ただお互いの存在を確かめあう静かな時間——。その静けさを壊したのは激しい地響きだった。

「何……!??」

蒼は再び円を背後に庇うと、地に伏したままの鬼に鋭い視線を向ける。

鬼は片腕で地面を這いつくばり、円たちに向かって来ていた。

「止めを刺す」

目を瞑っていて…という蒼に、円は首を振って抵抗する。

「あたしもあなたと一緒に……！」

蒼にとってはこうして妖の命を奪うことは日常茶飯事なのだろう。けれど、きつとその度に、蒼の心は小さく悲鳴を上げたはずだ。

感情の籠らない瞳の奥に優しさがあることを円は知っているから

（ひとりで背負わせたりしない！）

蒼に全てを任せ自分だけ妖とはいえ、ひとつの生命を奪うことから目を逸らすなど出来はしないのだ。

「わかった」

頷く蒼に一瞬目を向け、すぐに円の視線は鬼へと注がれる。

『このお…、よくもお！』

醜くのと打ち回る鬼の姿を円は悲痛な心で見つめた。未だかつてこんなにも凄惨な光景を彼女は見たことがなかった。

それでも円は今すぐにこの場から逃げ出したい衝動を抑え、しっかりと目の前の光景を見据える。

蒼が天に手をかざすと、彼の手中に仄かな光が宿る。その光に惹かれるようにして、どこからともなく水が集まってきた。やがて水は大きな球体の塊となり、蒼の頭上で渦を巻く。

『おのれえ……！』

一瞬だった。鬼は水に飲み込まれ、円の目の前で跡形もなく消え去る。

「終わったよ……」

蒼が円に労わるような瞳を向けた。円は自分がひどい表情をしていることを知られたくなくて、蒼の胸元に顔を埋める。

蒼はそっと円の頭に手を置くと、優しく撫でてくれた。

ぼんやりとした頭で円は考える。この人の背負っている物はとてもなく重いと。きつと、いままでたいした苦勞もせずに着てきた円では想像もできないほどに……。

それでも、円は蒼と共に歩いていきたいと思う。繋いだ想いを今度は離さずに……いつまでも――。

（だって、あたしはこの人の妻になるんだから）

円は顔を上げると蒼に向かって微笑みかける。蒼も小さく笑みを浮かべてそれに応えた。

ずっとずっといつまでも一緒に――。

夜空に浮かぶ満月に円は願うのだった。

命を狙われるという壮絶な事件から一週間の日々が過ぎた――。

蒼に寄り添われ家へと帰りついてから、円は高熱を出し寝込んでしまったため、その後の処置を知ったのは事件から一週間後、つまり今だ。

今だに気だるい身体を起こし、円は熱心に両親の話に耳を傾けていた。

ふたりの話によると――円の殺害計画を練ったのは陰陽寮でも一部の者たち、さらに詳しく言うと相沢氏とその取り巻きたちだったという。彼らには厳重な処罰が下され、二度と朝廷の土を踏むことはないだろうということ……。

その話に安堵すると共に、円の胸に一陣の冷たい風が吹く。

「――玉山は……？」

あの男と目が合った時のことを円は忘れられなかった。

「ああ、その術者は……」

安明が言葉を濁し、障子の向こうへと視線を泳がせる。

「どうしたの？」

「実はな……、消えたんだ。――姿をくらませた」

「――え」

安明の説明によると、玉山は陰陽寮の正規の術者ではなかったらしい。よって身元不明。首謀者の相沢氏も玉山のことは詳しく知らなかったらしい。

「まったく、相沢氏も困ったもんだ。俺は父として、娘にとって最高の縁組を整えただけなんだがなあ」

「宮廷での出世なんて、今さら考えていないのにねえ」

父の言葉に弥生がころころと笑う。我が両親ながら、随分と能天気なものだと円は苦笑を禁じ得ない。

「出世は仁に任せてる」

安明は弟の名を出すと、そう言えば…と話題を変えた。

「仁に蒼君への伝言を頼んだんだが…『円が寂しがっているから見舞いに来てやってくれ』って」

「な……！ 誰が寂しがって…」

「まあ。照れなくてもいいのよー、円」

「照れてない！」

本当は父の言葉はすばり、凶星だ。鬼に迫られたあの夜から、一度も蒼には会っていない。……寂しかった。

「蒼君はヘタレだからな！。お前が危険な目に遭ったのは自分のせい……なんて考えて、悩んでるんじゃないか？」

「悩むって……、何を？」

「そりゃお前……」

父は一瞬口をつぐみ、言葉を溜める。

「円との結婚だよ」

「えー！」

円は目をまん丸くして、安明の顔を見つめた。

そんな……。信じられない。

でも、もしかしたら…という思いが円の胸をよぎる。

（あたしのことを面倒だっと思っちゃったのかな……）

あんな風に事件に巻き込まれて、簡単に敵の罠に捕まって、頭の足りない子だと思われたのだろうか。

（呆れられちゃった？）

じわ…と涙をにじませる娘に、安明は慌てる。

「わあ！ 冗談だって、円！ 蒼君がお前のことを大好きなのは知ってるだろ！？」

……知ってる。確かにあの夜、お互いの気持ちを通じ合ったと感じた。だけどそれは、ただの錯覚かもしれない…と今に思う。
蒼に捨てられたらどうしよう。

騒ぐ両親を部屋から追い出し、円は途方に暮れた。

唐紅の章 14

「おい。いい加減円ちゃんに会いに行つてやれよ」

雨竜家の屋敷奥の蒼の部屋で光秀は寝転がりながら言う。

「……」

「無視かよ！……お前、円ちゃんが危険な目に遭つたのは自分のせいだとか思つてんの？」

「……思つてる」

「このまま一緒に居たらまた円ちゃんを傷つけるかもしれないからつて婚約のことはなしにしようとか思つてる？」

「……ああ」

べし、と光秀は容赦なく蒼の頭を叩いた。

「お前、本当に円ちゃんのこと好きなわけ？」

「当たり前だ」

「だったら、そんなこと考えんなよな」

じろり、と光秀に睨まれ、蒼にしては珍しく言葉を詰まらせる。

「円ちゃんだつてお前に惚れてるんだろ？　好きって言われたんだろ？」

「言われた……」

蒼は未だに信じられない……といった様子で頷く。まさか円と相思相愛になれるとは夢にも思っていなかったのだ。

「だったら傍に居てやれよ。俺が守つてやる！　くらいの気概見せるよ。だいたいなー、お前円ちゃんが他の男のものになるとか許せるわけ？」

蒼の眉根に皺が寄る。……考えたくもない。

「無理だろ？　だったら、円ちゃんの人生背負つて生きていけ」

今まで、たくさんものを背負つて生きてきた。そのどれもが重く蒼にのしかかり、彼の心を疲弊させていく原因だった。――だけ

もしも、円の想いやこれからの人生を背負っていくことが出来たなら……。それは、どれほど幸福なことなのだろう。

（必要なのは手放す覚悟じゃない。……未来へ進む勇気だったんだ——）

これから先、何があっても。どんなに苦しいことがあったとしても、円が一緒ならば乗り越えて行ける。

周りの目も、世間の評判も関係ない。自分が必ず円を守ってみせる。そして円も、きっと蒼のことを守ろうとするのだろう。

蒼は弱い人間だ。完璧じゃない。だからこそ、お互いに支え合って生きていけばいい。

（会いたい——円に）

伝えたい言葉がある。

「光秀……ありがとう」

蒼の感謝の言葉に光秀は目を丸くする。長年付き合ってきたが、蒼が素直にありがとうを言ったことなど一度としてなかった。

背けられた横顔に目を向けると、耳まで真っ赤に染まっていた。

どうやら蒼は少し成長したらしい……と光秀は思う。きっとこれから先、友人はもっともっと変わって行くのだろう。そしていつか家族というものを知った時、本当の幸せを知る。光秀はそのいつかが待ち遠しく感じた。

やがて蒼は立ち上がると外套を羽織る。

「行つて来る」

どこに、とは言わなかった。言わなくても光秀にはきつと分かっているだろうから。

外の日差しを浴びて、蒼の瞳が煌めきを増した。この瞳を隠せずに見つめた少女の顔を思い浮かべ、蒼は恋しさのあまり、そっと吐息を漏らしたのだった。

「雨竜家のご当主がいらっしゃいました」

突然の蒼の訪問に円はぎょつとした。慌てて手鏡を覗きながら髪を整える。

「お部屋へお通してもよろしいですか？」

使用人の言葉に円はええ…と答えた。やがて、優雅に廊下を進む足音が聞こえてくる。

「蒼様がお目見えになりました」

「……どうぞ」

障子が開き、蒼が室内へと入ってくる。使用人は一礼するとその場を去った。

円は緊張した面持ちで座敷に座っている。なにせ、家族以外の異性を自室に招き入れたのは初めての経験だったのだ。それは同時に蒼が円にとってもはや他人ではないことを表していた。

「もう調子はいいの？」

「はい。……だいぶ」

「よかった」

心底ほつとしたような蒼の声音に円は胸を高鳴らせる。

（心配してくれてたんだ……）

だけど、そうならもっと早く見舞に来てほしかった。

「あの……、今日は大事な話があつて来たんだ」

その言葉に円の身体がびくりと反応する。

（もしかして本当に――）

婚約解消なんてことになるのだろうか……？ 表情を沈ませ俯いている円に蒼は不思議そうな視線を向ける。

「円？」

「は、はい！」

「あのね――」

蒼は円の手を取り、そつと彼女を立ち上がらせる。反対に、自分は畳の上へと跪いた。

「何して……」

戸惑う円に小さく微笑みかけると、蒼はとても大切な言葉を紡ぎ

だす。

「——鬼灯円さん……。俺の妻に…家族になつてください」

「あ……」

直接、蒼から求婚の言葉を聞くのはこれが初めてだった。じわり…と涙が滲んでくるのを感じる。

「これから先、俺と一緒にすることで苦労もすると思う。それでも俺は…君を手放したくない。——手放せない」

真摯に円の瞳を見つめ、たどたどしく…けれど素直に自分の気持ちを伝えてくれる蒼に、円は堪らない幸福を感じた。

（蒼は——不器用な人だ）

生き方がとても不器用な人。けれど、そんなところも愛おしく感じる。

支えていけるだろうか……。蒼の重荷を共に背負い、彼と一緒に歩いていけるだろうか——？

（出来る出来ないじゃないわね）

そうしたいと願うなら。自分が蒼と生きていきたいと思うのなら

——答えはもう、決まっている。

「——はい」

円は満ち足りた表情で答えた。

「円……本当に？」

「はい」

信じられないといった表情を浮かべる蒼に、円は思わず笑ってしまふ。頷く以外の答えなど、あるはずがないのに。

それでも蒼が信じられないと言うのなら、何度だって答え続けよう。ふたりには、これからたくさんの時間があるのだから——。

唐紅の章 14（後書き）

これで『唐紅の章』は終了です。
ここまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございました。
これから唐紅の章を本編として、蒼と円の小話などをちよくちよく書いていきたいと思っています！

桃園の章 1

鬼灯円には、結婚を約束した人がいる。

結婚は女の義務だと女学校では教えられてきた。恋愛感情は必要ない。

それがなんの因果か……、自分を好きだと言って求めてくれ、そして自分も好きだと思える人の元へと嫁に行くことが決まった。

最初はすぐにでも嫁入りする勢いだったが、婚約者の彼——雨竜蒼が、そんなに急ぐ必要はないと言ったので、結婚話は延期となり

正直ほつとした。蒼とずっと一緒に生きていきたいとは思ってたが、妻としての役割が自分に務まるかと不安でもあったのだ。

「ねえ、どう思う？」

「どうって……」

同じ学舎に通う友である美鈴みすずに意見を求めるが、彼女は困ったように首を傾げる。

「私、何についての意見を求められてるのかしら？」

「だからー、前は結婚結婚って言ってたのに、急にさあ……」

「結婚が延期になったことが不満なんだ？」

「まあ、そうかな」

ほつとしたけど、不満だった。だって、蒼がそんなことを言うなんて思ってもみなかったのだ。

「それは、彼も安心したからなんじゃない？」

「安心？」

「そう。前は自分の片思いだったから、早く円を自分のものにしないと誰かに持って行かれちゃうんじゃないかーって焦ってたと思うの。でも今は……」

美鈴は悪戯っぽく笑うと「両思いなんですよ？」と円に訊く。

「まあ、ね」

面と向かって訊かれると照れる。円はごほん…と咳払いをして羞恥心を誤魔化した。

「だから、焦る必要はないって彼は判断したんじゃないの？」

「そうかな……」

本当にそうかな。円も、美鈴が今言ったようなことを考えた。だけど、そんなふうに楽観視してもいいのだろうか。

これは、蒼が自分たちの関係を見つめなおすために取った時間なのでは…と円は思っていた。

蒼はずっと自分のことが好きだった。それはもう、想像もできないほどに。でもその気持ちは、円と会えない間に大きく成長したものだ。

こうして円と向き合って、蒼は自分に失望したりはしなかったのだろうか？

えてして、憧れとは美しく美化されるものだ。蒼の中の円と、現実の円との間に違いが全くなかったと言えば嘘になるだろう。

蒼が自分の気持ちを考え直した結果、円とは結婚できないと結論付けられることが彼女は恐ろしかった。

（あたしって、こんなに後ろ向きだったっけ？）

そんなことはない。むしろ、どちらかというと前向きな性格だったはずだ。

きつと、自分がこんなふうになるのは蒼に関してだけ。

彼の存在が大きくなりすぎて……、すごく好きで大切で、だからこそ不安で。

もどかしい想い。

「ふう……」

円は憂鬱な息を吐いた。

蒼は自邸の執務室で書類整理に精を出していた。

近頃は仕事が忙しいために、円に会っていない。そのことが、蒼の気持ちを暗くさせていた。

昔は、会わなくても平気だったのに。

（どんどん欲張りになってるな……）

あまり多くを求めすぎてはいけない。だが、円に関しては、次々と欲求が湧き出てくるのだ。

あれもしたい、これもしたい。あれもしてほしい、これもしてほしい。際限がない。

本当は、当初の予定通りにすぐにも結婚がしたかった。だが、その気持ちをぐつと堪えたのは円のためだ。

円が結婚という事柄に対して不安を抱いていることを蒼は知っていた。彼女の仕草や表情を見ていればわかる。

だから、彼女に心の準備をする時間を与えたいと思ったのだ。

円が自分を好きだと言って、ふたりの将来を考えてくれている。それだけで十分すぎるほど幸せなのだから。

——だけど、と思う。もしも円がこの期間に心変わりしてしまったらどうしよう……と蒼は気が気でなかった。

もしかしたら自分を好きだと言ってくれたあの時は、気持ちが盛り上がっていただけかもしれない。冷静になった今、はたして円はそれでも自分を好きでいてくれるのだろうか？

最近、会っていない婚約者。けれど、最後に会った時、少しだけ様子が変だった。

（もしかしたらあの時、別れを切り出そうとしていたのか——？）

そう思うと、会いたいのに会うのが恐くなる。

本当は、急ぎの仕事はだいたい片付いたのだ。だが、円に会えない理由が欲しくて仕事に逃げている。

このままではいけない。

わかっている。わかってはいるのだが……。

蒼は眉根の皺をそつと伸ばした。

桃園の章1（後書き）

久しぶりの更新です。

蒼も円も、同じ悩みを抱えていますね！。

もどかしい！

桃園の章2（前書き）

久しぶりの更新で申し訳ないです……！

桃園の章 2

「——花祭り？」

「ええ、そうよ。明後日にあるの、一緒に行かない？」

「明後日か……」

「たしか、予定は何も入っていなかったはずだ。」

「うん、行く！」

「ちょうど気分が塞いでいたところだ。ぱーっと出かけて沈んだ気持ち晴朗らしまおう。」

「そう思い、円は美鈴に元気よく返事をした。」

「よかった……！」

すると美鈴もずいぶんと喜んでくれた。

「あのね、今年はどうしても円と行きたかったのよ。」

「……？　なんで？」

「円は花祭りという行事を美鈴に聞いて初めて知った。どうやら、都のはずれで行われる恒例行事らしい。知る人ぞ知る、隠れた人気行事とのこと。」

「花祭りにはとっても素敵な催しがあつてね——」

美鈴が夢見る瞳で語り出したことによると、祭りには自分が大切だと思ふ人と行かなければならないらしい。家族や友人、恋人……誰でもいいらしいけれど、それともうひとつ、大事な決まりごとがあるのだ。

自分が相手に伝えたい言葉を花に託して、祭りの終わりに互いの花を交換するのだという。

「へえ……、たしかに素敵ねー。……ん？　それって……」

「円は私の大切なお友達だから……」

はにかんだようにほほ笑む美鈴に、円の胸はきゅっとなる。

（——美鈴……）

彼女がそんなに自分を大切に思ってくれていたなんて。

美鈴とは今年の組み分け班で偶然一緒になって以来の付き合いだ。不思議と馬が合い、今では親友と呼べるほどの仲になっている。

「美鈴……ありがと、ね」

ちよつと照れた表情の円に、美鈴はふふ……と笑みを返した。

「せっかくのお祭りなんだもの。お花、忘れないでね」

「わかつてるって!」

「本当に? 円はうつかりさんだから心配……」

冗談ではなく、本気で心配そうな眼差しを向けられて、円はうつ

……と詰まる。

「あたしって、そんなに信用ない?」

「そうねえ、そうかも!」

「うつっ!」

ぐさり……と言葉が胸に突き刺さる。

(ひ、ひどい……!)

汚名返上のためにも、祭り当日にはとびきり素敵な花を用意してやる!

円はそう、心に決めたのだった。

——翌日。

円は美鈴に送る花を探して街中をさ迷っていた。

「あ——……」

ふ、と目に飛び込んできたのは、ある屋敷の庭さきに咲いている愛らしい花だった。

「かわいい」

見たことがない花だ。なんという花だろう……。

じ……とその花を見ていると、「あの……」と声をかけられ、円は驚きで一瞬息を吸うのを忘れた。

「あ、ごめんなさいね! 驚かすつもりではなかったのだけれど……」

心配そうな瞳をこちらに向けているのは、おっとりとした雰囲気
の婦人だ。この屋敷の奥方だろうか。

「この花を見てらしたの？」

「あつ、はい！」

「これはね、お花好きのわたくしのために主人が異国から取り寄せ
てくれたのよ」

「うふふ…」と笑う婦人はとても幸せそうだ。きっと、御主人のこと
をととても愛しているのだろう。

「ふわり。風が吹き、彼の——蒼の香りを運んできたように感じた。
「ゼラニウムっていうのよ」

花言葉は『真の友情』そう彼女は説明してくれた。

「あのっ！ この花、わけてもらうことはできないでしょうか!？」
友人に送る花を探しているという円の話を聞き、夫人は快く了承
してくれた。

「じゃあ、色んな色を混ぜてみましょうね」

「なんだかとても楽しげに、そして器用に花をまとめていく。あつ
という間に愛らしい花束が出来上がった。

「ありがとうございます！」

花束を受け取ると、円は夫人に向かって深々と頭を下げた。

「いいえ、また寄ってちょうだい」

「そう言つと、もうすぐ主人が帰ってくるから、と彼女は歌うよう
に言つて屋敷の奥に消えた。

「きっと、夫を迎える準備があるのだろう。」

「夫かあ」

「いいな…」と思う。

「なんだかむしように蒼に会いたくなつた。けれど、彼はきっと仕
事で忙しくしているのだろう。」

（押しかけても迷惑……だよな）

花束を握り締め、その香を嗅ぐ。

「……甘い」

けれど、円の心は苦いままだ。

あちらこちらから花が咲き乱れ、その色彩と香りがどれもすばらしい。

「すごい……！」

圧倒された心地で円は周りを見渡した。花祭りの会場には思ったよりも多くの人が訪れていた。その誰もが花の美しさにつつとりとしている。

「そうでしょう？ この季節が一番きれいに咲くのよ」

「へえー、あつ、あそこ！ お団子売ってる！」

庭園の中に仮設された甘味処を見つけると、円は花も忘れてそちらにふらりと引き寄せられる。

「もう、円ったら！ 花より団子なんだから……」

呆れたようにしながらも、美鈴はちゃんと円に着いて来てくれる。

「みたらし団子二人前で！」

「へい！ お待ち！」

団子を片手に、ふたりは長椅子に座りながら景色を楽しむ。

「素敵ね……」

「ええ……」

こんなふとした瞬間、円はやはり蒼のことを考えてしまう。

美鈴との穏やかな時間もとても愛しいものだけど、今ここに彼がいたら……と考えずにはいられない。

（蒼……、今何してる？）

あたしのこと、ちょっとは考えてくれてるの？

自分のように、毎日毎日、想ってくれているだろうか……？

そうだとい。もしそうだったら、とても幸せだと思える。

時間はまたたく間に過ぎた――。

夕日色に染まる花々は、青空の下で見るのとはまた違う美しさがあった。

「もうすぐ終わりね——……ね、そろそろ私に花をくれない？」

「うん、はい！」

円は昨日の花束を差し出す。美鈴の顔がぱあっと明るくなった。

「わあ……、すごくかわいい」

「花言葉は『真の友情』よ」

「……円。ありがとう」

互いに微笑み合う。ふたりの心は確かに繋がっていると確信できた瞬間だった。

「私から円にはこれ——」

美鈴が取り出した花は……

「桃……の花？」

「そう。花言葉はね——」

——『私はあなたの虜です』

「これを持って、婚約者のところに行きなさい！」

「え、え……！ 美鈴？」

「私は円にはいつも笑顔でいてほしいから。だから、これが私の気持ち」

ちゃんと自分の気持ちを伝え、彼の気持ちも聞いてきなさい……と美鈴は円の背中を押してくれているのだ。

（美鈴……）

胸の奥がじんわりと熱くなる。

「ありがとう」

「どういたしまして」

やがて、夕日が沈み始めた——。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6515k/>

きらきら万華鏡綺譚

2010年12月5日00時25分発行